

譯注

## 『桂芳集』抄譯注稿

近衛家の漢學研究會  
(代表 川崎 佐知子)

『鴨東通信』No.115（二〇二三年九月）掲載の仁方越洪輝氏「雙柏文庫の肖像畫」「石井利延像」「石井利昌像」に敬嘆した。中村直勝氏の古文書コレクション「雙柏文庫」（大和文華館所蔵）に含まれる肖像畫三點を紹介する内容であった。像主は、五攝家の九條家に諸大夫として仕えた石井利延（一六〇三—一六八三）と石井利昌（利延三男、一六六九—一七〇九）の父子で、ともに正五位下に陞つた。『地下家傳』第三十一（覆刻日本古典全集 現代思潮社 二〇〇八年）には、利延に次いで男金利（一六四六—一七〇七）の経歴も記される。

ところで、石井利延には、金利、利昌のほかに、世俗の譜に記録されないもう一人の男がいた。元祿十一年（一六九八）に大徳寺芳春院第六世となつた桂嶽宗芳（一六五六—一七〇〇）である。その詩集を『桂芳集』という。『大徳寺禪語錄集成』第六卷（法藏館 一九八九年）に収載される。同書の平野宗淨氏解題、および竹貫元勝氏『京都・紫野大徳寺僧の略歴 その法脈と茶道とのつながり』（淡交社 二〇一二年）に桂嶽宗芳の略歴が載る。

さきに公表した川崎佐知子「大徳寺芳春院と近衛家」（『立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要』第十五號、二〇二二年三月）では、『桂芳集』をもとに、桂嶽宗芳の行狀を探つた。『桂芳集』には、桂嶽宗芳が自身の出自に言及するくだりを意外なほど多く見い出せた。石井利延や金利との縁故も、『桂芳集』から読み取れたのだった。もうひとつ、『桂芳集』には、芳春院を菩提所とする近衛關白家第二〇代基熙（一六四八—一七二二）との交流が描かれていた。應酬は元祿十二年、同十三年に集中しており、それほど數が多いというわけでもない。公益財團法人陽明文庫（京都市右京區）に傳存する「基熙公御詠草」や『應圓滿院殿御詠歌』（川崎佐知子『應圓滿院殿御詠歌 近衛基熙の家集』古典ライブラリー 二〇二二年）に、桂嶽宗芳とのやり取りが見て取れ、「基熙公記」など陽明文庫所蔵の記録類に詳細に綴られた往來にも心動かされた。そこで、『桂芳集』三百餘首から、近衛基熙との關わりで詠まれた詩を中心に二十七首を選び、譯注を試みた。

譯注作業のため、近衛家の漢學研究會を結成し、二〇二一年四月か

ら、『桂芳集』會讀を繼續してきた。構成員は、川崎佐知子、芳村弘道、松尾肇子、中本大、黃鶯、高語莎の六名である。努めて精確であるよう心がけたが、不本意にも行き届かなかつた點が多多ある。大方のご批正を乞う。

(川崎)

## 〔凡例〕

- 一、本稿は、『大德寺禪語錄集成』(法藏館 一九八九年) 所收の『桂芳集』(以下、「底本」) より、近衛基潤との關わりから詠まれた詩を中心にして二十七首(底本に私に附した通し番號では、180—185・189・192—199・205—210・213・216・218・223・224・228番詩)を選び出し、本文・詩型・韻字・訓讀・注・通釋を示した。校異・參考記事を附した場合もある。
  - 一、字體については、原則として正體に統一を圖った。踊字は、原則として本来の漢字に直した。假名の踊字はそのままとした。
  - 一、底本には訓點を附すが、本文にはこれを附さず、訓讀に反映することを原則とした。なお、底本の訓みを改めた場合もある。
  - 一、適宜、本文に句讀點を附した。
  - 一、校訂注は、底本の文字を置き換えるべきものに「」をもつて表記した。
  - 一、参考又は説明のために附した傍注には( )を附して區別した。
  - 一、底本の缺損文字は、字數を推算して□で示した。
  - 一、各詩の末尾の( )内に、譯註擔當者の名を記した。
  - 一、譯註に際し、次の参考文献より多大なる學恩を受けた。
- 平野宗淨『増補龍寶山大德禪寺世譜附索引』(思文閣出版 一九七九)

年)

黒板勝美・國史大系編修會『公卿補任』第四篇(増補修訂國史大系 吉川弘文館 一九七七年)

橋本政宣『公家事典』(吉川弘文館 二〇一〇年)

大槻幹郎・加藤正俊・林雪光『黃檗文化人名辭典』(思文閣出版 一九八八年)

中村元『佛教語大辭典』(東京書籍 一九八一年)

織田得能『織田佛教大辭典』(大藏出版 二〇〇五年補訂縮刷版)

綠川明憲『豫樂院鑑 近衛家源公年譜』(勉誠出版 二〇一二年)

入矢義高監修・古賀英彦『禪語辭典』(思文閣出版 一九九一年)

禪學大辭典編集所編『禪學大辭典』(大修館書店 一九八五年)

上野洋三『近世和歌撰集集成』第二卷・第三卷堂上篇上下(明治書院 一九八七年)

野間光辰編・新修京都叢書刊行會編著『新修京都叢書』(臨川書店 一九九三—二〇〇六年)

諸橋轍次著・鎌田正・米山寅太郎修訂『大漢和辭典』(大修館書店 一九八四—一九八六年)

織田得能『佛教大辭典』(大倉書店 一九三〇年)

藤井讓治・吉岡眞之監修『後水尾天皇實錄』第三卷(天皇皇族實錄 105 ゆまに書房 二〇〇五年)

妙法院史研究會編『堯恕法親王日記』第一卷—第三卷(妙法院史料 吉川弘文館 一九七六—一九七八年)

総合佛教大辭典編集委員會編『總合佛教大辭典』(法藏館 二〇〇五

年)

佛書刊行會編纂『翰林五鳳集』(大日本佛教全書第144・145・146冊)

名著普及會  
一九八三年)

佛書刊行會編纂『念大休禪師語錄外一部』(大日本佛教全書第96冊)

名著普及會  
一九八二年)

芳澤勝弘編著『雪叟紹立 雪叟詩集訓注』(思文閣出版 一〇一五

「角川日本地名大辭典」編纂委員會編集『角川地名大辭典 26 京都府』

上下(角川書店 一九八二年)

『新編國歌大觀』『新編私家集大成』(日本文學 Web 圖書館「和歌・

連歌・俳諧ライブラリー) 古典ライブラリー)

川崎佐知子『應圓滿院殿御詠歌 近衛基熙の家集』(古典ライブ

ラリー 二〇一二年)

右のほかは本文中に適宜記した。

一、『基熙公記』、「基熙公御詠草」、「无上法院殿御日記」などについ  
ては、公益財團法人陽明文庫より格別のご配慮をたまわった。心  
より御禮申し上げる。

一、本稿は、近衛家の漢學研究會の構成員(川崎佐知子・芳村弘道・  
松尾肇子・中本大・黃鶯・高語莎)が嚴正なる討議を重ねた結果  
である。

一、本研究は立命館白川靜記念東洋文字文化研究所の日本文献研究プロ  
ジェクトの成果である。

一、本研究はJSPD 科研費JP20K00354 の助成を受けた。

### 〔譯注〕

180 元祿己卯夏奉迎左相府殿下鶴駕野偈誌喜

鳴鑾響度紫林巒 ○○●●●○○

林下悲迎長者冠 ○●○○●●○○

満塉松風非没意 ○●○○○●●○○

爲君吹奏萬年歡 ●○○●●○○○

▼詩型 七言絶句 ▼韻字 巒・冠・歡(平水韻上平聲十四寒韻)

### ▼訓讀

元祿己卯夏左相府殿下の鶴駕を迎へ奉り野偈もて喜びを誌す

鳴鑾 響き度る 紫林巒

林下悲しく迎ふ 長者の冠

満塉の松風 意を没きに非ず

君が爲に吹奏す 萬年の歡

### ▼注

○元祿己卯夏 『基熙公記』元祿十二年二月二十九日條によれば、こ  
の日基熙は大徳寺に參詣ののち芳春院に赴き、漢詩を作った。180番詩はこの  
即座に和歌を作つて返禮とし、歸宅後に漢詩を作つた。

180番詩はこの  
日基熙に獻じたもの。詩題は元祿十二年(一六九九)の「夏」と記す  
が、「春」が正しい。基熙の返歌は『應圓滿院殿御詠歌』1948、180番詩  
に次韻の基熙の漢詩は『應圓滿院殿御詠歌』1949。(▼参考)

○左相府 左大臣を指すのが通例であるが、基熙はこのとき左大臣を  
辭して久しく『公卿補任』元祿三年條に「十二月廿六日辭左大臣」、  
他の詩では關白を示す「執柄殿下」と稱している。不審。

○鶴駕 元來は皇太子・仙人の乗る車をいう。ここでは基熙の車を指す。宋・陳與義「開壁置窗命曰遠軒(壁を開き窓を置き命じて遠軒と

曰ふ」其一の結びに「會有鶴駕賓、經過來見客（會す鶴駕の賓有りて、  
經過し來たりて客に見はん）」とある。

○野偈 佛僧が自作の詩を謙遜してい。鄙作。

○鳴鑾 元來は天子の車につけてある鈴。ここでは基熙の車のこと。  
唐・李嶠「侍宴長寧公主東莊應制」（長寧公主の東莊に宴するに侍す應  
制）の冒頭に「別業臨青甸、鳴鑾降紫霄（別業 青甸に臨み、鳴鑾  
紫霄に降る）」とある。

○紫林巒 紫に木木の茂る小山。紫野にある大德寺を指す。『桂芳集』  
27番「登紫阜龍峰掛錫芳春禪院」（紫阜龍峰に登りて錫を芳春禪院に掛  
く）詩には「紫阜」とも稱している。「林巒」は廣く山を指すが、唐・  
李白「贈參寥子」の「長揖不受官、拂衣歸林巒（長揖して官を受けず、  
衣を拂ひて林巒に歸る）」のように世俗を避けた地をイメージさせる。  
「紫林」も仙人の居るところをいう。

○林下 静かな林のなか。隱遁する場所。また五山に數えられない寺  
を指すこともあり、あるいはここでは大德寺をいうか。唐・羊士諤「西  
郊蘭若」に「林下僧無事、江清日復常（林下 僧事無く、江は清く日  
も復た常なり）」とある。

○長者冠 高貴な人。基熙を指す。「冠」を附することで直接にいうこ  
とを避けたものと考えたが、最も高貴であることをいうか。

○滿塢 山あいに満ちる。『桂芳集』「芳春院十境詩并序」の272「松月  
軒」の題下に「在茶堂之香積之南數畝之青松、摩漢凌雲。一溪和尚手  
鬪也。（茶堂の香積の南に在る數畝の青松、漢を摩し、雲を凌ぐ。一  
溪和尚手づから鬪くなり）」と注し、「滿塢青松月掛亮、和風又聽談宰

相（満塢の青松 月 亮を掛け、風に和して又聽く 宰相を談するを）」  
の句がある。

○松風 松林に吹く風。前注「満塢」項参照。『桂芳集』「芳春院十境  
詩并序」の262「序」にも「有高林松月等之風境」という。

○萬年歡 長壽と幸福を祈る曲の名。仁如集堯「寄松祝」に「松閒吟  
步共盤桓、深綠葱葱保歲寒。若把風聲歌一曲、爲君可奏萬年歡。（松  
閒に吟歩しごとに盤桓たり、深綠葱葱として歲寒に保つ。若し風聲を把  
りて一曲を歌はば、君が爲に奏すべし 萬年歡）」（『翰林五鳳集』卷  
六十四）とある。

#### ▼通釋

元祿己卯の年の夏、左相府殿下のお乗り物をお迎え申し上げ、鄙  
作に喜びをしるす

御車の鈴が 紫野の木木の繁る小山に響き渡る。  
この静かな林の中 謹んで貴人をお迎えする。  
山あいに満ちる松風は 思いがないわけではなく、  
貴方のために萬年歡を吹き鳴らしています。

#### ▼参考(1)

『基熙公記』元祿十二年二月二十九日條  
早刻參詣大德寺、時正結之被拜御牌、後行芳春院、素純西堂、了首座  
等令同道、有非時、亭坊「桂嶽宗芳」有詩、卽座以和哥謝之、申刻歸家、  
詩哥等追而可注之、

#### ▼参考(2) 基熙の返歌 『應圓滿院殿御詠歌』 1948

大德第一座前德禪桂嶽和尚のもとにまかりぬるに謝偈あり感吟の  
あまり彼韻の字をたよりに和哥一首唐詩一絶をもてこゝろさしを

のふといふことしかり

さく梅の花芳しき春に來て轉るよりも法やよろこぶ

▼参考(3) 基潤の次韻詩（『應圓滿院殿御詠歌』1949）

遠出京師入翠巒 遠く京師を出でて翠巒に入る。

一場風物古今冠 一場の風物 古今に冠たり。

鳥鳴花發暖霞滿 鳥鳴き 花發き 暖霞満つ。

識得芳春千萬歡 識り得たり 芳春 千萬の歡びを。

（松尾）

### 181賀石牕和上住初山

獅王演法最初巒 ○○●●●○○

外護有人一眾安 ●●●○●●○

先佛未過瞻後佛 ○●●●○●●○

飲光不用匿金欄 ●○●●●○○

▼詩型 七言絶句（承句犯孤平）

▼韻字 巒・安・欄（平水韻上平聲十四寒韻）

▼訓讀

石牕和上の初山に住するを賀す

獅王演法す 最初巒 外護人有り 一眾安し

先佛未だ過ぎず 後佛を瞻る 飲光用ひず 金欄を匿すを

▼注

○石牕和上 石窗道鐸（一六三八一一七〇四）、遠江の人。初山寶林寺の獨湛性瑩の弟子となり、延寶四年（一六七六）に獨湛の法を嗣ぎ、天和二年（一六八二）に獨湛が黃檗第四世住持となるのに従い、副寺

となり、後に西堂となる。元祿二年（一六八九）に歸庵するも、同五

年、獨湛から高泉性澈の代替わりに際して本山を看守した。同十二年、

檀越の近藤登之助徳用の請を承け、初山の第四世住持となり、六年の

後に示寂する（『黃檗文化人名辭典』）。また19番詩「次石窓和尚被賀

芳春補席韻」に見える。

○初山 濱名湖五山の一つ初山寶林寺（寛文四年〔一六六四年〕）の開

山）。石窗は第四世。初世は獨湛性瑩。

○獅王 獅王（師）子王の略。獅子に同じ。『佛教語大辭典』「獅子」項

に「獅子に同じ。獸中の王であるから師子王といい、佛は人の王であるから獅子にたとえる。また佛・菩薩が一切おそれるものないことにたとえる。『大方廣佛華嚴經』（佛陀跋陀羅譯）卷三十三に「菩薩論師王、所行無斷絕（菩薩師王を論じ、所行斷絶すること無し）」。ここでは佛陀の意。

○演法 佛法、教義を講説すること。『法句經』卷上「明哲品」に「聖人演法、慧常樂行、仁人智者（聖人法を演じ、慧常樂行、仁人智者）」。元・郭天錫「臨濟慧照玄公大宗師語錄序」に「出廣長舌相。爲人開堂演法。（廣長舌相を出だし 人の爲に堂を開き法を演ず）」。

○最初巒 佛陀が最初に説法した山。ただし佛陀が最初に説法した所は鹿苑とされる。『金剛般若疏』卷一「第十正釋文」條に「大迦葉問曰、何處最初說法。阿難合掌向涅槃方答大迦葉云、如是我聞。佛初在鹿苑、爲五比丘說法（大迦葉問ひて曰はく、何れの處にか最初に説法すと。阿難合掌して涅槃に向かひて方めて大迦葉に答へて云ふ、是くの如く我聞く。佛初めて鹿苑に在りて、五比丘の爲に説法すと）」。「初巒」

は詩題の「初山」に掛けている。

○外護 『織田佛教大辭典』に「一護の一。佛所制の戒法、吾が身口意の非を護るを内護とし、族親檀越、衣服飲食を供するを外護とす」。外護者に同じ。『佛教語大辭典』「外護者」項に「外部から保護を加える者の意。僧團の外にあって、權力または財力をもつて佛教を保護し、種種の障害を除いて傳道の便宜をはかる人。また佛教の普及を援護する國王などをいう」。『摩訶止觀』卷四下「如母養兒。如虎銜子。調和得所。舊行道人乃能爲耳。是名外護（母の兒を養ふが如く、虎の子を銜むが如く、調和して所を得。舊行道人にして乃ち能く爲すのみ。是れ外護と名づく）」（織田引）。ここでは石窟道鐸を寶林寺の住持に請うた近藤徳用を指す。

○一眾 羣人。『景德傳燈錄』卷十六「福州雪峰義存禪師」條に「此一眾盡是學佛法僧（此の一眾は盡く是れ佛法僧を學ぶ）」。

○先佛 「以前に現われた佛たち」（『佛教語大辭典』）。ここで「先佛」は「前佛」と解すべきであろう。「前佛は釋迦を指し、後佛は彌勒を指す」（『織田佛教大辭典』）。また「前佛後佛の眾生（釋迦と彌勒の間に生まれたため佛に會うことができない眾生）」という語がある（『榮華物語』卷二十二 とりのまひ）。なお「先佛」の用例は、『圓悟佛果禪師語錄』卷十五「遵先佛軌儀、成就三十七品助道法（先佛の軌儀に遵ひ、三十七品助道の法を成就す）」などに見える。

○飲光 羅漢の名。慧琳『一切經音義』卷一（大般若經卷十）「大飲光、即大迦葉波之美稱也。大毘婆沙論云、上古有仙人、身有光明、能攝諸光、皆令不現。故號飲光。摩訶迦葉波是此仙種也。身黃金色、世人號

之曰大飲光（大飲光、即ち大迦葉波の美稱なり。大毘婆沙論に云ふ、上古に仙人有り、身に光明有りて、能く諸光を攝すれども、皆現ざらしむ。故に飲光と號く。摩訶迦葉波は是れ此の仙種なり。身黃金色にして、世人之を號けて大飲光と曰ふ）。

○金襴 僧尼が着す金襴の袈裟。『無門關』「迦葉利竿」條に「迦葉因阿難問云、世尊傳金襴袈裟外、別傳何物（迦葉阿難に因りて問ひて云ふ、世尊金襴袈裟を傳ふるの外、別に何物を傳ふ、と）」。

### ▼通釋

石臘和尚が初山の住職となられるのを祝う

獅子王に喩えられる佛陀が最初に說法した山といふべき初山に石臘和尚は住持となられた。そこには外護者がおり、人人は安樂に日を送っている。

前佛が去らない前に後佛の姿を見る（前住持が寺を退く前に石臘が晉

山したという意か）。

飲光羅漢のような和上ゆえ、金襴の袈裟を隠す必要などなく、堂堂と晉山されるがよい。

（芳村）

182芳春禪舍新構鎮守土地祠、祭祀稻荷神靈。 執柄殿下詣祠前

瑜珈護教南山境 有台詠。拙作恭奉和三十字之末字

禪舍祈靈魔外屏 ○●○○○○●○○○

言竭丹誠台詠歌 ○●○○○○●○○○

昭昭感應老神影 ○○●●●○○

▼詩型 七言古詩 ▼韻字 境・屏・影 (平水韻上聲二十三梗韻)

▼訓讀

芳春禪舍 新たに鎮守土地祠を構へ、稻荷の神靈を祭祀す。

執柄殿下 祠前に詣で台詠有り。拙作もて悲しく三十一字の末の

字に和し奉る

瑜伽の護教 南山の境

禪舍 靈を祈つて魔外屏まげしりぞく

言 丹誠を竭くす 台詠の歌

昭昭たり 感應 老神の影

▼注

○執柄殿下 關白である基潤を指す。『基潤公記』元祿十二年（一六九九）

九月二十日條によれば、前月八月、桂嶽宗芳の弟子の中に狐に取りつかれた者があり、基潤が靈符を與えると狐は退散した。桂嶽が稻荷社を勧請したので、この日基潤は大徳寺方丈に參詣ののち、芳春院において法樂を催し和歌を詠じた（▼参考）。桂嶽はその末の「かげ（影）」を韻字として即座に182番詩を和し、翌日清書して届けた。

○瑜伽護教 瑜伽は密教。伏見稻荷は、東寺（教王護國寺）草創の際に眞言密教と習合した。

○南山境 伏見稻荷大社は、京の東山三十六峰の最南端、稻荷山に鎮座した大神を祀る。

○祈靈 稲荷社の神靈を祈る。唐・顧況「宿昭應」に「武帝祈靈太乙壇、新豐樹色遼千官（武帝 精を祈る 太乙壇。新豐の樹色 千官を遶る）」（『三體詩』）。

○魔外 「天魔」と外道。佛道以外の道を修め、佛法を妨げるもの。」（『佛教語大辭典』）。宋・釋德洪「靈源清禪師贊五首」其三「魔外如驚濤、

大願眞祇柱（魔外は驚濤の如く、大願は眞に祇柱）」（石門文字禪）。

○丹誠 まごころ。西胤俊承「奉和嬪眞居士宿直鹿苑詞下有感作」に「清齋寓直□園深。奉主丹誠可練金（清齋に寓直す □園深し。主に

丹誠を奉ず 金を練るべし）」（『翰林五鳳集』卷三十一）。

○台詠 基潤が詠じた和歌を指す。台は尊稱。

○昭昭 はつきりとしている。宋・阮閱『詩話總龜前集』卷一「達理門」所引『青箱雜記』に「自然逢吉慶、神理亦昭昭（自然と吉慶に逢ひ、神理も亦 昭昭たり）」。宋・普濟『五燈會元』「福州玄沙師備宗一禪師」に「更有一般說昭昭靈靈（更に一般に昭昭靈靈と說ふ有り）」。

○感應 信心が神佛（ここでは稻荷の神靈）に通じること。唐・釋道世『法苑珠林』卷二十五、敬佛篇・觀音部・感應緣「晉河內竇傳」に「（沙門支遁）山曰、若能至心歸請、必有感應（山曰く、若し能く至心もて歸請すれば、必ず感應有らんと）」。

○老神 おいがみ。ここでは稻荷大神をいう。『點鐵集』「年來總作維摩病、堪笑東西二老神（年來總べて維摩の病を作す、笑ふに堪えたり 東西二老神）〔坡十六〕」。

▼通釋

芳春院に新たに鎮守の祠を建てて稻荷の神靈をおまつりした。執

柄殿下が、祠前において和歌を詠じられたので、三十一字の末の字に和し拙作を奉る

南の山にあって眞言の守護の教えを傳える（稻荷社）。

わが禪院にその神靈を祈つて、天魔や外道を退ける。  
殿下が眞心を盡くして和歌を詠まれたところ、

はつきりと通したのであらう、稻荷の老神の影がさし（燈火が風に搖れ）た。

▼参考(1) 基熙和歌（「基熙公御詠草」〔資料番號〈60266〉〕）

元祿のはしめつかた芳春院にいなりの社を勧請せられるのち詣て、

うつりきてこゝにいなりの神ならはそへよみのりの燈のかけ

▼参考(2) 『基熙公記』元祿十二年（一六九九）九月二十日條

巳刻、參大德寺方丈、燒香、念經、其後、向芳春院、一如同道也、〔略〕於芳春院、詠和哥所蒙之閒書遣之了、抑此事者、先月桂嶽和尚弟子之中、爲野狐被犯、余與靈符、早速狐離散、仍院主勸請稻荷社、仍所令法樂也、和哥如此、加詞書、

元祿十二の秋九月のはしめつかた芳春院に稻荷の社を勧請せられる後詣て  
基熙

うつり来てこゝにいなりの神ならはそへよ御法の燈のかけ

桂嶽有卽和、明日可給清書旨、相歸了、

（松尾）

183 己卯秋掃弊門迎 執政左府公台駕。有瓊瑤之賜山詩恭奉次鈞

韻

尊貴屈隆僧舍中 ○●●●○●○

僉言菩薩宰官船 ○○○●●○○

機政之暇遊絃誦 ○●○●○○○●

禮樂重興三代風 ●●○○●●○○

▼詩型 七言絶句 ▼韻字 中・船・風（平水韻上平聲一東韻）

### ▼訓讀

己卯秋、弊門を掃きて、執政左府公の台駕を迎ふ、瓊瑤の賜山の詩有りければ、悲んで鉤韻に次し奉る

尊貴に屈降す僧舍の中 僉な言ふ菩薩宰官の船

機政の暇に絃誦に遊びて 禮樂重ねて興す三代の風

### ▼注

○己卯秋 元祿十二年（一六九九）秋。『基熙公記』閏九月三日條に關連するか。（185番詩▼参考）

○掃弊門 「弊」は壊れかけた、粗末な、の意。『凌雲集』所收、上毛野穎人「春日歸田直疏（春日歸田して直疏す）」に「干祿終無驗、歸田入弊門（祿を干むれど終ひに驗無く、田に歸りて弊門に入る）」とある。ここでは典型的な謙讓表現として用いられている。「掃門」は客を迎えるために門を掃き清めること。「掃門待客雪飛初、有約今宵定挂車（門を掃き客を待てば雪初めて飛ぶ、約有り今宵挂車を定む）」（月舟壽桂『雪夜待故人』『翰林五鳳集』卷二十二）などが参考になる。

○瓊瑤 美しい寶玉。轉じて優れた詩文の比喩となり、貴人の詩作の美稱とされた。「雨中口號一章投頂。妙尊翁況右。兼索沙舟老一笑。伏上賜瓊瑤之報（雨中口號一章投頂せらる。妙尊翁況右・索沙舟老と並に一笑す。伏して瓊瑤を賜るるの報を上る）」（策彦周良『謙齋稿』）。○賜山 「山」は靈山徳禪寺か。「賜山詩」は徳禪寺にある我我が、殿下から賜った詩の意味。

○鉤韻 「鉤」は君主。「鉤詩」は君主の詩。五山では「鉤命」、すなわち庇護者である室町將軍の命で詩作を獻じる例が枚舉に暇がない。

「欽奉相府鈞命。和愚中和尚。謝賜信衣韻（欽んで相府の鈞命を奉じ、愚中和尚に和す。信・衣韻を賜るを謝す）」（西胤俊承『眞愚稿』）、「謹奉應鈞命記一時盛事云（謹んで鈞命に應じ奉り、「一時の盛事」を記すと云ふ）」（策彦周良『謙齋稿』）など用例多數。

○屈降 身を屈して拜禮すること。「佛祖統紀」「十三祖龍樹尊者」には「外道眾來共議論、一言便屈降伏出家（外道眾來りて共に議論すれば、一言にて便ち屈降し伏して出家す）」とある。

○宰官 「十一面觀音菩薩三十三應現身像」（觀音菩薩が様様な姿に變化して現れる、それぞれの姿を象った像）の一つ「宰官身」を言う。「宰官」は官僚。日本では束帶姿の大臣に擬すことが多く、希世靈彥「贊北野神君」詩に「現宰官身北野君、世間榮辱任紛紛（宰官身と現ず北野君、世間の榮辱紛紛たるに任す）」などの例がある。

○機政 「萬機政務」。萬機に關與する重責である攝政・關白の職務を言う。

○絃誦 琴をひきながら詩を吟じ、書を讀むこと。轉じて、勉學に勵むこと。『禮記』「文王世子」の「春誦夏弦（春に誦し、夏に弦す）」の鄭玄注に「誦謂歌樂也（誦は歌樂を謂ふなり）」とあるのが典據。

○三代風 「三代」は中國古代國家である「夏・殷・周」を言う。古代の理想國家によつて培われた、文章を尊び、禮法と音樂に親しむといふ徳目が、文化の繁榮した漢の武帝には備わつてゐるとする『漢書』

「武帝本紀」の「有三代之風」の表現で知られる。本邦では『十八史略』

「武帝紀」の「表章六經、實自帝始。數獲祥瑞。白麟・朱雁・芝房、寶鼎、皆爲樂章、薦之郊廟。文章亦至帝世始盛。人以爲有三代之風焉。

（六經を表章するは、實に帝より始まる。數祥瑞を獲たり。白麟・

朱雁・芝房、寶鼎、皆樂章を爲りて、之を郊廟に薦む。文章も亦帝の世に至つて始めて盛んなり。人以て三代の風有りと爲す」とあるのに據つたのであろう。他方、禪林では、中國宋代の學者・程顥（明道）

が定林禪寺で眾僧の入堂する様子を見て、「三代禮樂盡在是矣（三代の禮樂盡く是に在り）」（『居士分燈錄』）と評したことが知られていた。また『佛祖統紀』卷四十五「法運通塞志十七之十二仁宗」に見える「三代禮樂於縉衣中（三代の禮樂は縉衣の中にあり）」という措辭は夢嚴

祖應『早霖集』所收「見性海住東福山門疏」などにも引用され、禪僧の自負を示すことばとしても愛唱された。この一句は『句雙紙』にも採錄されている。なお、攝家の人物を中國の皇帝に準えることは、本邦において忌避されることはなかつた。たとえば策彦周良「大原野千

句連歌記」において、近衛稙家の弟である聖護院門跡道澄を「周公旦」に譬える例もある。ここでは「三代風」に關わる複數の典據が響き合ふことを狙つて、一句の措辭を爲したものと考えられる。なお、本詩の制作經緯を知る上で参考となる『基熙公記』元祿十二年閏九月三日條では、このとき、南都樂人の辻近寛が同道し、「晚暮、有小音樂」ともあり、あるいは當座でその様子を詠じたか。（185番詩▼参考）

○重興 佛教語で、寺院の「中興」ののち、更に再興の功を爲すことを言う。

### ▼通釋

元祿十二年秋、弊門を掃き清め、執政左府公のお出ましを迎えた。

美しい詩を賜つたので、謹んで次韻し申し上げた詩

その龍樹尊者のように尊いお姿は、僧堂において寺僧が思わず身を屈して禮拜するほどに威光に溢れており、皆はその尊さを觀音菩薩が宰相の姿で化身して我我の前に示現したかのようだと譽め讚えています。

殿下はお忙しい政務の合間にも學問に勵み、教養を深めることに努められ、そのご教導は文化・學問が繁榮した武帝の時代に譬えられるほどであり、

禮樂を重んじることについてはわれわれ禪學にも自負があるものの、殿下の深い學識の放つ威光は、文運の隆盛を更にもたらすようにも思われます。

(中本)

184 一乘法親王翠華臨於弊院、拙作謹奉和所賜祇陀

琅琅玉韻最清新  
○○●●●○○

筆力縱橫好縛麟  
●●○○●●○

□喜少林花結果  
○○●●●○○

聯芳毓秀竹園春  
○○●●●○○

▼詩型 七言絕句 ▼韻字 新・麟・春 (平水韻上平聲十一真韻)

▼訓讀

一乘法親王の翠華弊院に臨み、拙作もて謹みて賜ひし所の祇陀に和し奉る

琅琅たる玉韻最も清新たり 筆力縱橫して好し麟を縛するに

□喜ぶ少林花の果を結ぶを 聯芳毓秀竹園の春

▼注

○一乘法親王 南都興福寺門跡の一乘院宮眞敬親王 (一六四九—一七〇六)。基潤室の品宮常子内親王の同腹弟であるうえ、京での里坊が近衛家今出川御殿に隣接しており、近衛家とは親しく往來していた。184番詩は、一乘院宮眞敬親王の詠に應じた桂嶽宗芳の作。『基潤公記』元祿十二年 (一六九九) 閏九月三日條に、基潤に同道して一乘院宮眞敬親王が芳春院を訪れたとある。(185番詩▼参考)

○翠華 カワセミの羽で飾った天子の旗や車の傘をいう。ここでは一乘院宮眞敬親王の車を指す。司馬相如「上林賦」「建翠華之旗、樹靈鼈之鼓 (翠華の旗を建て、靈鼈の鼓を樹つ)」(『文選』卷八)。李善注「翠華、以翠羽爲葆也 (翠華、翠羽を以て葆と爲す)」。

○祇陀 梵語 Jeta の音譯語彙で、勝の意。舍衛國波斯匿王太子の名前とされる。ふつう寺院を指すが、ここでは一乘院宮眞敬親王が作った詩であろう。唐・慧琳『一切經音義』卷十 (金剛般若波羅蜜經後秦) に「祇樹梵語也。或云祇陀、或云祇洹、或云祇園、皆一名也。正梵音云、誓多。此譯爲勝。波斯匿王所治城也。太子亦名勝。(祇樹梵語なり。或いは祇陀と云ふ、或いは祇洹と云ふ、或いは祇園と云ふ、皆一名なり。正梵音は誓多と云ふ。此譯して勝と爲る。波斯匿王の治むる所の城なり。太子も亦た勝と名づく)」。唐・慧淨『雜言』に「揚錫指山阿、攜步上祇陀。(錫を揚げて山阿を指し、攜歩して祇陀に上る)」。

○琅琅 擬聲語。寶石や金屬が觸れ合って鳴る美しい音。一乘院宮眞敬親王の詩の音律が美しいことを形容するか。司馬相如「子虛賦」に「礧石相擊、琅琅磕磕。(礧石相ひ擊ち、琅琅磕磕)」(『文選』卷七)。○玉韻 他人の詩の敬稱。白居易「將發洛中枉令狐相公手札兼辱二篇

寵行以長句答之（將に洛中を發たんとして令狐相公の手札を柱げて兼ねて辱くも二篇に寵行せられ長句を以て之に答ふ）に「玉韻乍聽堪醒酒、銀鉤細讀當披顏。（玉韻乍ち聞きて酒を醒ますに堪へ、銀鉤細かく讀みて當に顔を披くべし）」とある。

○清新 清らかで俗でないさま。唐・杜甫「春日憶李白」に「清新庾開府、俊逸鮑參軍。（清新たる庾開府、俊逸たる鮑參軍）」とある。

○筆力縱橫 筆力は運筆や表現上の勢い。縱橫は自由自在、思いのまま。宋・劉克莊「竹溪生日二首」其一に「兩翁雖老殊精悍、筆力縱橫可擊鯨（兩翁老いると雖も殊に精悍にして、筆力縱横して鯨を掣くべし」とある。掣鯨は文才が優れ、筆勢が力強くてよどみのないさまを形容する。

○縛鱗 詩語としてやや珍しい。一乘院宮眞敬親王の優れた文才を稱えるか。詩語「獲鱗」が連想される。『春秋』哀公十四年の「春、西狩獲鱗（春、西に狩して鱗を獲たり）」。杜預注「鱗者仁獸、聖王之嘉瑞也。（鱗者は仁獸、聖王の嘉瑞なり）」。劉琨「重贈盧謹（重ねて盧謹に贈る）」に「宣尼悲獲鱗、西狩涕孔丘（宣尼は獲鱗を悲しみ、西狩は孔丘を涕かしむ）」（『文選』卷二十五）。李白「古風」其一に「希聖如有立、絕筆於獲鱗。（聖を希ひて如し立つ有らば、筆を獲鱗に絶たん）」。

○喜 喜か。宋・邵雍「四喜」に「一喜長年爲壽域、二喜豐年爲樂國（一喜は長年壽域と爲し、二喜は豐年樂國と爲す）」。○少林 元來は少林寺のことであるが、廣く佛教の寺院を指す。『送僧和尚天柱集後偈頌』に「貢士侍中直公」と題して「從茲此土及

西天。普覆慈雲洒甘雨。少林花開還結果。徧布神州知幾顆（茲此の土より西天に及び、普く慈雲を覆ひ甘雨を洒ぐ。少林花開き還た果を結び、神州に徧布すること知んぬ幾顆なるかを）」。

○結果 實を結ぶ。成果をあげる。ここでは一乘院宮眞敬親王と芳春院との因縁、もしくは一乘院宮眞敬親王から賜つた詩であろうか。『續傳燈錄』卷三十「萬壽普信禪師」に「且道時節因縁與佛法道理是同是別。良久曰。無影樹栽人不見。開華結果自馨香。（且つ道ふ、時節因縁は佛法の道理とはれ同じきか是れ別なるか、と。良久しくして曰ふ、影無く樹栽えて人見ず、華を開き果を結びて自ら馨香す、と）」。

○聯芳 連なつた花。ここでは臨席の人人の詩歌、あるいは「芳」に一乘院宮眞敬親王の「祇陀」をかけ、自分が和して詩を作つたことをいうか。宋・釋重顯「送勝因長老（勝因長老を送る）」に「黃梅散席三百載、續焰聯芳事空在。（黃梅散席三百載、焰を續け芳を聯ねて事空しく在り）」（『明覺禪師語錄』卷五）。

○毓秀 育秀。草木を育てる。秀れた人材を盛んに育成する。明・謝遷「嚴梅谷八十壽詩」に「梅谷含芳娛晚景、蘭階毓秀駐春輝（梅谷芳を含みて晚景を娛しみ、蘭階秀を育てて春輝を駐む）」。

○竹園春 「竹園」は竹を植えた庭園。天子の子孫、皇族の別稱でもある。前漢の孝文帝の子孝王が梁に封ぜられ兔園を作り、竹を多く植えたという故事（『史記』梁孝王世家）に由來する。第一〇八代後水尾院皇子である一乘院宮眞敬親王のことをいう。「春」は實際の季節ではなく、「竹園」を贊美する詩的表現か。北周・庾信「奉報趙王惠酒（趙王惠の酒を惠せらるるに報い奉る）」に「梁王修竹園、冠蓋風

塵喧。（梁王竹園を修め、冠蓋風塵喧<sup>かまびす</sup>し）。『徒然草』第一段「御門」

の御位<sup>おほんくらゐ</sup>はいともかしこし。竹の園生の、末葉<sup>そのふ</sup>まで人間の種ならぬぞやんごとなき」。

### ▼通釋

一乘院宮眞敬親王の御車が芳春院までお出し下さり、賜つた詩に拙作もて謹んで和し奉る

（一乘院宮眞敬親王の作られた詩は）音律が清らかで美しい。

（親王は）文才が高く、自由自在に詩を作られる。

喜ばしいのは弊院の花が咲いて實をつけたことである。

かの竹園の春に花が連なり咲き、草木が盛んに育つごとく、

皇族には秀でた方が多くおられる（親王もそのお一人である）。

（黄）

### 185 次多聞上人韻

耳聞不如心聞親

●○●○○○○○

相逢尙見道情眞

○○●●●○○

心中教外共商量

○○●●●○○

自此交盟期百春

●●○○○●○

▼詩型 七言絶句 ▼韻字 親・眞・春（平水韻上平聲十一眞韻）

### ▼訓讀

多聞上人の韻に次す

耳聞は心聞の親に如かず 相逢ひ尙ほ見る 道情の眞なるを

心中教外 共に商量して 此れより交盟し 百春を期す

### ▼注

○多聞上人 南都興福寺の多聞院院主、英筭教實房。185番詩は、元祿十二年（一六九九）閏九月三日、基熙と一乘院宮眞敬親王に隨行した多聞院英筭の詩を受けた桂嶽宗芳による次韻で、183・184番詩の一連と思われる。桂嶽宗芳と多聞院英筭は、「桂嶽未刻來、英筭相共言談」（『基熙公記』元祿十三年八月十五日條）などとあるように、基熙のもとで同席することが多かつた。

○耳聞 耳で聞くこと。噂に聞くこと。「耳聞不如目見（耳聞は目見に如かず）」（『説苑』政理）。「心聞」とともに、「多聞院」を意識した表現。

○心聞 心で聞くこと。善惡・是非などをよく聞き分け判断すること。

心耳。「寒夜無風竹有聲 疏疏密密透松檻 耳聞不似心聞好 歆卻燈前半卷經（寒夜風無くして竹に聲有り。疏疏密密 松檻を透る。耳聞は心聞の好きには似かず。歎卻す 燈前半卷の經。）」（『江湖風月集解』）（聽雪（四明虛堂愚和尚））。

○道情 道義心。南朝宋・謝靈運「述祖德詩二首（祖德を述ぶる詩二首）」其二に「拯溺由道情 龕暴資神理（溺るるを拯ふは道情に由り、暴しきに龕つは神理に資る）」（『文選』卷十九）。

○教外 禪宗の要諦をあらわす教外別傳。教理に相違すること。

○商量 あれこれ相談して考えること。「賣弄諸人購諸方、德山臨濟没商量。拈槌堅拂非吾事、只要聲名屬北堂。（諸人を賣弄し諸方を購す。德山臨濟 没商量。拈槌堅拂は吾が事にあらず、只要す 聲名の北堂に屬さんことを。）」（『狂雲集』上巻「陳蒲鞋」）。

○交盟 固い約束を交わすこと。策彦周良「梅邊會友」に「夜夜梅邊月過 交盟修得喜無他 一枝春色一麟足 不覓花中十友多（夜夜梅

邊月の過るに和す。交盟修得喜び他無し。一枝春色 一麟足る。花中十友の多きを覧めず」）『翰林五鳳集』卷六とある。

○百春 幾たびもめぐつくる春。瑞溪周鳳「祇園」に「去年今日祇林外。妍暖佳晴洛水東。重問梅花花有語。從茲相約百春風。（去年今日祇林の外。妍暖佳晴 洛水の東。重ねて梅花を問へば花に語有り。茲より相約さん 百春の風）」『翰林五鳳集』卷五十三）。

### ▼通釋

多聞上人の詩に次韻した詩

耳で聞くことは心で聞いて親しむには及ばない。

互いに逢い、さらに見て、気持ちを口にすれば眞となる。

心中教外 共に斟酌し、

たつた今から誓いを交わし、幾春を重ねることを約束しよう。

▼参考 『基潤公記』元祿十二年閏九月三日條

行芳春院、一門主「一乘院宮眞敬親王」同道、多門院、近家「南都樂人辻近寛」等同來、先參德禪寺鎮守、是去月加御修理、余沙汰也、先

月廿七日正遷宮、仍所參詣也、殊去曉、有靈夢、別而加信心者也、喜

悦不少、凡今度加御修理之事、有神感歟、丹堂「端堂紹肅、大德寺第二百二十六世」、梅心「梅岑宗點、大德寺第二百五十世」、桂嶽等罷出、有點心、其後向方丈、見重寶等、其後行芳春院、余詠法築和哥、一門、桂嶽有和句、此詩哥數篇、晩暮、有小音樂、戌刻歸家了、（川崎）

189 高倉帝後宮有稱小督官女。能彈琴、自命其琴曰時雨。此器也、

於今歷數百歲、爲陽明殿下被器重。茲歲九月秋雨夜、設管

絃宴、殿下手彈其琴、使野衲賦俚詩即興賦而備 台覽。

金雁鉢繫古絃

○●○○●●○○

遺音尙憶昔人賢

○○●●●●○○

依稀似曲又堪聽

○○●●●●○○

秋雨梧桐殿閣前

○●○○●●●○○

▼詩型 七言絶句

▼韻字 絃・賢・前（平水韻下平聲一先韻）

### ▼訓讀

高倉帝の後宮に小督と稱する官女有り、能く琴を彈ず。自ら其の

琴を命じて（其の琴に命けて）時雨と曰ふ。此の器や、今に於いて數百歳を歴て、陽明殿下的爲に器重せらる。茲の歳の九月秋雨の夜、管絃の宴を設け、殿下手づから其の琴を弾じ、野衲をして俚詩を賦せしむ。即興に賦して台覽に備ふ。

金雁鉢蟬古絃を繫く

遺音尙ほ憶ふ昔人の賢なるを

依稀として曲に似て又た聽くに堪へたり

秋雨梧桐殿閣の前

### ▼注

○高倉帝 平安時代末期の天皇（一一六一一一八一、在位一一六八

一一一八〇）。後白河天皇の第七皇子、母は平滋子（平清盛の妻時子の異母妹）。平徳子（清盛の女）を中宮とし、後の安徳天皇を儲ける。

○小督 平安末期の女官。保元二年（一一五七）生まれ、卒年未詳。藤原成範の女。『平家物語』（流布本）卷六「小督」に、「宮中」の美人、琴「筝の琴」の上手」とある。平清盛の怒りに觸れて嵯峨に身を隠し

たところ、天皇の命を受けた源仲國が行方を尋ね、小督の彈ずる「想夫戀」の琴曲を聞きつけ彼女を見出でて宮中に連れ戻し、その後、天皇との間に姫（範子内親王）を生んだという。

○時雨 小督が用いた箏の銘。『基熙公記』元祿十一年十一月二十二日條に「時雨箏鎌出來、公韶卿持來之」とあり、雅樂（和琴・箏）を家職とする四辻公韶（一六七〇—一七〇〇）が近衛家にもたらした。『同』元祿十一年十一月二十六日條に「張絃」とみえ、その音色を「神妙無比類」と評す。『无上法院殿御日記』同日條にも「時雨のことのかさり出きて、四辻さい相「四辻公韶」持參」とある。『豫樂院鑑近衛家卿公年譜』寶永四年（一七〇七）條に「時雨」への言及あり。

○爲陽明殿下被器重 和習の受動表現。正確な古漢語の表現としては、「爲陽明殿下器重（陽明殿下の器重と爲る、陽明殿下に器重せらる）」あるいは「被陽明殿下器重（陽明殿下に器重せらる）」と書くべきである。

○茲歲九月秋雨夜 元祿十二年（一六九九）九月のこと。

○俚詩 粗野で通俗的な詩。自己の詩作の謙辭。野詩、鄙詩などに同じ。明の唐文鳳「與大尹黃彪書（大尹黃彪に與ふる書）」『梧岡集』卷十に「拙文俚詩、繕寫成軸、以寓嚮仰之情（拙文俚詩、繕寫して軸を成し、以て嚮仰の情を寓す）」とある。また「細河阿州太守、見惠海石兩片、副之以和歌一章、率綴俚詩奉答」と題する詩がある（『翰林五鳳集』卷三十一）。

○金雁鉢蟬 黄金の琴柱と螺鈿で細工した蟬の形の飾り。唐・溫庭筠「彈箏人」詩（『溫飛卿詩集』卷五。増注本『三體詩』卷一作「贈彈箏

人」）に「天寶年中事玉皇、曾將新曲教寧王。鉢蟬金雁皆零落、一曲伊州淚萬行（天寶年中玉皇に事へ、曾て新曲を將て寧王に教ふ。鉢蟬金雁皆な零落し、一曲の伊州淚萬行）」とある。『三體詩』の元の天隱注に「劉禹錫云、河南房處士、得善箏人而夭。作傷〔秦〕姝行曰、攻檠（瑰）寶柱秋雁行。又溫庭筠詩、銅箏絃絕雁行稀」「溫飛卿詩集』卷四「和友人悼亡」詩「鉢箏絃斷雁行稀」。蓋鉢箏者、箏飾。金雁者、箏柱也（劉禹錫云、河南の房處士、箏を善くする人を得れども夭す。〔秦〕姝を傷む行を作りて曰はく、攻檠（瑰）の寶柱秋雁行る。又た溫庭筠の詩に、銅箏絃絶えて雁行稀なり、と。蓋し鉢箏は、箏の飾り。金雁は、箏の柱なり」とある。劉學鋗『溫庭筠全集校注』（中華書局、二〇〇七年七月、四七八頁）に「金雁、對箏柱的美稱。箏柱斜列有如雁行，故云。李商隱『昨日』：「十三絃柱雁行斜。」と釋する。なお「金」

雁行、故云。李商隱『昨日』：「十三絃柱雁行斜。」と釋する。なお「金」  
雁」「蟬」は秋の縁語。

○遺音尙憶昔人賢 「遺音」は前代から傳わった音樂。魏の嵇康『琴賦』に「情舒放而遠覽、接軒轅之遺音（情舒放して遠く覽て、軒轅の遺音に接す）」（『文選』卷十八）とある。この句は箏ではなく、「琴」にまつわる古えの賢人のさまざまな故事を想起しての措辭と解釋される。

○依稀似曲又堪聽 「依稀」は、類似しているさま。あたかものようである。疊韻語。雙聲語の彷彿（彷彿）、髣髴に同じ。唐の王昌「湘靈鼓瑟」詩（五律）に「寶瑟和琴韻、靈妃應樂章。依稀聞促柱、髣髴夢新妝。（寶瑟琴韻に和し、靈妃樂章に應ず。依稀として促柱を聞き、髣髴として新妝を夢みるがごとし）」とある。「似曲」は、ここでは梧桐の枯れた葉に滴る雨音が箏曲に似ているという意。この句は、唐の

高駢「風箏（風鐸の類）」詩「夜靜絃聲響碧空、宮商信任往來風。依稀似曲纔堪聽、又被風吹別調中。（夜靜かにして絃聲碧空に響き、宮商信任す往來の風に。依稀として曲に似て纔に聽くに堪へ、又た風に別調中に吹かる）」の轉句を借用したもの。高駢詩は五代の韋縠『才調集』卷七・『萬首唐人絕句』七言卷四十七・『聯珠詩格』卷十六「用被字格」・『唐詩紀事』卷六十三・『詩話總龜』前集卷二十一・五代の孫光憲『北夢瑣言』卷七「高崇文相國詠雪」條・元の辛文房『唐才子傳』卷六・『古今事文類聚』續集卷二十二などに見える。また轉結二句は禪の語錄にもしばしば引かれる。『禪語辭典』に「なんとなく樂のしらべのようで聞き惚れていたら、たちまち風に吹かれて別の調べに変わつて行つた。高駢「風箏」の詩の句（『全唐詩』卷五百九十八）。『傳燈錄二十五天台德韶章』問曰、恁麼卽大千同一眞如性也。師曰、……。〔同二十六王泉義隆章〕〔雪竇語錄〕問、猿抱子歸青嶂後、鳥銜華碧巖前。古人意旨如何。師云、夾山猶在。學云、和尚如何。師云、……」とある。また『五燈會元』卷十二「雲峰文悅禪師」條・『禪林集句』・『句雙子尋覓』・『點鐵集』にも見える。『北夢瑣言』卷七「高崇文相國詠雪」條に、「鎮蜀日、以蠻蠻侵暴、乃築羅城。城四十里。朝廷雖加恩賞、亦疑其固護。或一日聞奏樂聲、知有改移、乃題風箏寄意曰、夜靜絃聲響碧空、宮商信任往來風。依稀似曲才堪聽、又被移將別調中。旬日報到、移鎮渚宮。」とある。

○秋雨梧桐殿閣前 白居易「長恨歌」に「春風桃李花開夜、秋雨梧桐葉落時（春風桃李花開くの夜、秋雨梧桐葉落つるの時）」とある。「長恨歌」は唐の玄宗と楊貴妃の戀情を詠じた名作で知られ、この二句は

『和漢歌詠集』下・781にも戀題で選録されている。「秋雨梧桐殿閣前」は、玄宗と楊貴妃の「長恨歌」の世界を借りて、高倉天皇とその寵愛を受けた小督の物語りに誘う結句となつており、「時雨」の琴が小督ゆかりの名器であることに繋げている。「桐」は琴（箏）の縁語。

#### ▼通釋

高倉天皇の後宮に小督という女房があり、琴を上手に彈いて、所用の琴に自ら時雨と名づけた。この樂器は今、數百年を経て陽明殿下に珍重されている。今年の九月秋雨の夜、管絃の宴を催され、殿下じきじきにこの琴をお弾きになつて、拙僧に詩作を命ぜられた。その場の感興にまかせて詩を作り、御覽に供した。

琴柱が黄金造りで、螺鈿の蟬形の飾りが施された琴に時代物の絃が張られた。

奏でられる古曲から昔の賢人の故事が今も偲ばれる。

折りからの雨音はあたかも琴曲のようで、ひとしお聞き込んでしまう。

（芳村）

殿閣の前の梧桐は葉が枯れ、そこに秋雨が降り注ぐ。

#### 192 心與竹俱空

陽明殿下詩歌集會之題

松梅永結歲寒盟



賢客曾呼君子名



學得心空高節處



儒衣僧服道雙成



▼詩型 七言絕句 ▼韻字 盟・名・成（平水韻下平聲八庚韻）

#### ▼訓讀

陽明殿下的詩歌佳會の題 心は竹と俱に空し

松梅と永く結ぶ 歳寒の盟 賢客曾て呼ぶ 君子の名

心空高節を學び得る處

儒衣僧服 道雙<sup>ふた</sup>ながら成す

▼注

○陽明殿下的詩歌佳會の題 『基熙公記』元祿十二年閏九月二十八日條

に、基熙邸にて公卿等の集まるところへ桂巖宗芳が來合わせ、基熙が十首を出題し、「詩哥一續」を興行したとある。このときの「桂巖和尚詩二首」は192・193番詩。(▼参考)

○心與竹俱空 唐・白居易の「偶題閣下廳」詩に「貌將松共瘦、心與

竹俱空（貌は松と共に痩せ、心は竹と俱に空し）」(『白氏長慶集』)とある。儒者の白居易による禪詩であることが注意される。192番詩は白詩の句を詩題とした。佛教語に「心空」がある。『織田佛教大辭典』「心空」項に「心性廣大萬象を含容す、之を大虛空に譬へて心空と云ふ」とある。加えて『佛教語大辭典』「心空」項に「心が障害を離れて空寂かつ無相であること」とある。用例として「心空意淨」(『賢劫經』)、「境滅心空」(『宗鏡錄』)があげられる。一方、竹は中身が空虚である。

〔竹心空、屈原自喻志通達也〕(竹の心は空しく、屈原自ら志の通達するを喻ふるなり)」(漢・王逸『楚辭章句』)。翫之慧鳳「墨菊說」に「幸有竹尊者、形枯心空(幸ひに竹の尊者有り、形枯れて心空し)」(『竹居清事』)とある。和歌題としての「心與竹俱空」は三條西實隆歌「なよ竹の折へくもなくなひくこそ世にふる道の心なりけれ」(『雪玉集』卷八・313<sup>4</sup>)の例がある。基熙が出した十首題のひとつ。

○松梅 「松梅」としか著されていないが、じつはこの句の主語「竹」を立つ。君子は其の性を見れば、則ち中立にして倚らざる者を思ふ。

が省略されている。松・竹・梅は寒さに耐えるものとして「歲寒三友」と稱され、高潔・節操の象徴。畫題のひとつ。

○永結歲寒盟 「永結」の例は、唐・李白「月下獨酌四首」其一に「永結無情遊、相期邈雲漢(永く結ぶ無情の遊、相ひ期せん邈かなる雲漢に)」(『李太白集』)。「歲寒盟」の例は、元・謝宗可「松梅」詩に「挺秀凝香一樣清 何妨同結歲寒盟(挺秀 凝香 一樣に清く、何ぞ妨げん同に歲寒の盟を結ぶを)」(『詠物詩』)とある。月舟壽桂「吾竹齋記」に「風雪煙霧雨、勿渝歲寒盟(風雪煙霧雨、歲寒の盟を渝ふること勿れ)」(『幻雲文集』)。

○賢客 賢い客。唐・杜甫「九日諸人集於林」に「老翁難早出、賢客幸知歸(老翁早く出で難く、賢客幸ひに歸るを知る)」(『杜工部集』)とある。竹との關係を考え合わせると、晉代の「竹林七賢」が想起される。

○君子名 竹は君子(徳の高い人)の象徴。『晉書』記載の王子猷が竹を愛し「此君」と稱した故事は平安時代に受容された。また「梅・蘭・竹・菊」は「四君子」と呼ばれる。唐・白居易「養竹記」に「竹似賢、何哉。竹本固、固以樹德。君子見其本、則思善建不拔者。竹性直、直以立身。君子見其性、則思中立不倚者。竹心空、空以體道。君子見其心、則思應用虛受者。竹節貞、貞以立志。君子見其節、則思砥礪名行、夷險一致者。夫如是、故君子人多樹之、爲庭實焉。(竹の賢に似たるは何ぞや。竹は本固く、固くして以て徳を樹つ。君子は其の本を見れば、則ち善く建ちて抜けざる者を思ふ。竹は性直く、直くして以て身を立つ。君子は其の性を見れば、則ち中立にして倚らざる者を思ふ。

竹は心空しく、空しくして以て道を體す。君子は其の心を見れば、則ち應用虛しく受くる者を思ふ。竹は節ありて貞、貞にして以て志を立つ。君子は其の節を見れば、則ち名行を砥礪し、夷險一致する者を思ふ。夫れ是くの如し、故に君子人は多く之を樹ゑて庭の實と爲す」とある。「君子名」は君子の名と解される。「名」は「名附ける」意での用例が見い出せる。明・王陽明「君子亭記」に「竹有是四者、而以君子名。(竹には是の四者有り、君子を以て名づく)」(『陽明先生集要』)とある。四者とは君子之徳、君子之操、君子之明、君子之容。

○心空高節 竹の特徴と君子の品格とを掛けた言葉。「心空」は前掲「心與竹俱空」項参照。「節」は竹のふしをいう。「高節」は身のふりかたが氣高いこと。唐・張九齡の「和黃門盧侍御咏竹」に「高節人相重、虛心世所知(高節 人相重んじ、虚心 世の知る所)」とある。南宋・方回「李仲賀墨竹四首」其三に「心空節勁翠筠濃、冷笑凡花誇治容(心空しく節勁く翠筠濃し、冷笑凡花治容を誇る)」(『桐江續集』)。藤原周光(『夏日禪房言志』)に「虚心爲友數莖竹、宿望他無千葉蓮(虚心友と爲る數莖の竹、宿望他無く千葉の蓮)」(『本朝無題詩』卷十)。義堂周信「竹贊二首」に「那期半幅溪藤上、高節虛心生面開(なんぞ期せんや 半幅の溪藤の上に、高節、虚心 生面開くを)」(『空華集』)とある。

○儒衣 儒者の衣服。學者の衣服。儒者、儒家思想のことをもいう。

藤原實範「春日遊東光寺」に「誰知僧律歸眞境、未脫儒衣染俗塵(誰僧律眞境に歸るを知るか、未だ儒衣を脱がずして俗塵に染む)」(『本朝無題詩』卷九)。

○僧服 僧尼の着用する衣服。ここでは佛道を意味する。南宋・葉茵「賈浪仙」に「若人了得推敵事、僧服儒衣一樣看(若し人の推敵の事を了得せば、僧服、儒衣、一樣に看る)」(『江湖小集』)。

○雙成 儒・釋の二つの道において悟りを開くことをいう。

#### ▼通釋

##### 陽明殿下的詩歌佳會における題詠

##### 心與竹俱空(心は竹のようによくある)

竹は松と梅と永遠に歲寒の盟を結び、賢い客は以前君子の名と呼んだ。(勉學や修行を通じて) 心が空しくなり、身のふりかたが氣高くなつた時に、儒家の教養を身に着けると同時に、悟りを開き佛道を成就することになるだろう。

#### ▼参考 『基熙公記』元祐十二年閏九月二十八日條

櫛笥中納言〔櫛笥隆慶〕、裏松前中納言〔裏松意光〕、右衛門督〔平松時方〕、宮内卿〔石井行豊〕等來、令招引者也、申刻、桂嶽和尚來、幸興行詩哥一續、余出題十首、余詠詩哥、各、裏松前中納言同、桂嶽和尚詩二首、賴庸〔丹波賴庸、式部丞藏人〕參之間、詠一首了、秉燭探題、戌半刻清書了、甚有其興、夜半各分散了、

(高)

#### 193 滯聲秋更急

千年只聽子陵名 ○○●●●○○  
人跡寥寥七里程 ○●○○●●○○  
僻地秋來雖物靜 ●●○○●●○○  
忙忙尚有急灘聲 ○○●●●○○

▼詩型 七言絶句 ▼韻字 名・程・聲（平水韻下平聲八庚韻）

▼訓讀

灘聲秋に更に急なり

千年只だ聽く子陵が名

人跡寥寥 七里程

僻地秋來物靜かなりと雖も

忙忙として尙ほ急灘の聲有り

○灘聲秋更急 灘聲は急流の響き。19番詩と同じ元祿十二年（一六九九）

閏九月二十八日の「陽明殿下詩歌佳會之題」における題詠である（192番詩▼参考）。白居易の五言律詩「陰雨」の領聯による句題。「灘聲秋

更急、峽氣曉多陰（灘聲秋には更に急に、峽氣曉には陰ること多し）」  
（『白氏文集』卷十八）。和歌題としては、三條西實隆歌「音まさる

八十瀬のなみやすゝか川秋行人のおもひととなる」（『雪玉集』卷八・3089）の例がある。

○子陵 東漢の嚴光。『後漢書』卷八十三・逸民列傳第七十三に「嚴光

字子陵、一名遵、會稽餘姚人也。少有高名、與光武同遊學。及光武卽位、乃變名姓、隱身不見。〔中略〕除爲諫議大夫、不屈、乃耕於富春山、後人名其釣處爲嚴陵瀨焉。（嚴光、字は子陵、一名は遵。會稽餘姚の

人なり。少くして高名有り。光武と同じく遊學す。光武の卽位するに及び、乃ち名姓を變へ、身を隠して見れず。〔中略〕除して諫議大夫と爲す。屈せずして、乃ち富春山に耕す。後人は其の釣處に名づけて嚴陵瀨と爲す」とある。嚴光は世俗を離れた高潔な隱者として後代の詩作によく取り上げられる。隱遁した嚴光が釣をしていた場所は「嚴陵瀨」「七里灘」「釣瀨」といわれ、承句の「七里程」や結句の「急灘聲」

にも通い合う。193番詩は一首全體がこの典故を踏まえるといつてよい

だろう。李翰『蒙求』の「伯成辭耕、嚴陵去釣（伯成辭して耕し、嚴

陵去りて釣る）」、李白「古風」其十二の「松柏本孤直、難爲桃李顏。

昭昭嚴子陵、垂釣滄波間。身將客星隱、心與浮雲閑。長揖萬乘君、還

歸富春山。（松柏本より孤直にして、桃李の顔を爲し難し。昭昭たり

嚴子陵、垂釣す滄波の間。身は客星と隠れ、心は浮雲と閑なり。萬乘

の君に長揖し、富春山に還歸す）など用例多數。

○人跡 人の足跡。晉・張協「雜詩十首」其九に「溪壑無人跡、荒楚

鬱蕭森。（溪壑に人跡無く、荒楚は鬱として蕭森たり）」（『文選』卷

二十九）とある。

○寥寥 空虚なさま。人氣無くがらんとしたさま。晉・左思「詠史八首」其四に「寥寥空宇中、所講在玄虛（寥寥たる空宇の中、講ずる所は玄虛に在り）」（『文選』卷二十一）とある。

○七里程 七里の行程。前掲「子陵」項参照。南朝宋・謝靈運「七里瀨」に「目睹嚴子瀨、想屬任公釣。（目に嚴子の瀨を睹て、想いは任公の釣に屬す）」（『文選』卷二十六）。荻生徂徠「七里灘」に「晚泊嚴陵瀨、江風吹客衣。（晩に泊る嚴陵瀨、江風客衣を吹く）」（『徂徠集』卷二）。

○僻地 遠い片田舎。唐・白居易「遊藍田山ト居」（藍田山のト居に遊び）に「擬求幽僻地、安置疏慵身。（幽僻の地を求め、疏慵の身を安置せんと擬す）」とある。

○秋來 秋このかた。「來」は時間を表す名詞につく接尾語。杜牧「懷鍾陵舊遊四首（鍾陵の舊遊を懷ふ四首）」其四に「控壓平江十萬家、秋來江靜鏡新磨。（控壓す平江の十萬家、秋來江靜かにして鏡新たに

磨く」とある。

○忙忙 せわしいさま。早瀬の響きを形容するのはややめずらしい。

宋・釋紹嵩「夜汎有懷（夜汎して懷ひ有り）」に「忽忘年老、忙忙汎夕流。（忽忘として年の老ゆるを忘れ、忙忙として夕流に汎かぶ）」とある。

○急灘聲 早瀬の響き。南宋・陸游「夜登小南門城上（夜 小南門の城上に登る）」に「月回高樹影、風壯急灘聲（月は高樹の影に回り、風は急灘の聲を壯んにする）」とある。

#### ▼通釋

灘聲秋更急（秋になると急流の音が一層はげしくなる）

（「灘聲」といえば）千年來（多くの詩作に）ただ嚴子陵の名前が詠まれる。

「七里灘」というところは人の足跡が少なく、がらんとしている。遠い片田舎は秋になると、物静かになるが、まだ急流の響きが騒がしく聞こえる。

（黄）

194 暮雨村橋濕〔暮雨村橋〕

水隔西東村落近



暮雲送雨濕橋頭



牧童只怕牛蹄滑



背上加鞭過下流



▼詩型 七言絕句 ▼韻字 頭・流（平水韻下平聲十一尤韻）

#### ▼訓讀

暮雨村橋を濕ふ

水西東を隔て村落近し

暮雲雨を送りて橋頭を濕ふ

牧童只だ怕る牛蹄の滑なることを

背上に鞭を加へて下流を過ぐ

#### ▼注

○暮雨村橋濕 「暮雨濕村橋」の誤りか。暮雨は夕方に降る雨。村橋は村の橋。詩題は白居易の五言古詩「渭村雨歸」の末句「蕭條獨歸路、暮雨濕村橋（蕭條たり獨り歸る路、暮雨村橋を濕す）」による。和歌題としては、三條西實隆歌「暮ぬとて人もやいそく雨きほふさとのいたはしをともとゝろに」（『雪玉集』卷八・313）の例がある。192・193番詩と同じく、元祿十二年（一六九九）閏九月二十八日の作で、基潤詠

の詩歌に應じたのだろう。（▼参考）

○水隔 川が間にあり、さえぎられる。白居易「席上答微之（席上微之に答ふ）」に「我住浙江西、君去浙江東。勿言一水隔、便與千里同。（我浙江の西に住み、君浙江の東に去る。言ふ勿かれ 一水を隔つるは、便ち千里と同じ、と）」とある。

○暮雲送雨 夕方の雲が雨を降らせる。唐・徐夤「山寺寓居」に「白雲送雨籠僧閣、黃葉隨風入客堂。（白雲雨を送りて僧閣を籠め、黃葉風に隨ひ客堂に入る）」。北宋・釋契嵩「次韻和酬」に「暮雲將雨苦紛紛、看雨攜君倚寺門。（暮雲と雨と苦だ紛紛として、雨の君を攜へて寺門に倚るを見る）」（『鐸津文集』卷十八）。

○橋頭 橋のあたり。白居易「寄答周協律（周協律に寄答ふ）」に「橋頭誰更看新月、池畔猶應泊舊船。（橋頭誰か更に新月をみる、池畔猶ほ應に舊船を泊むるべし）」。村庵（希世靈彥）の「橋納涼」詩に「橋

頭過雨涼多少、一一盤中一一珠。（橋頭雨過ぎて涼多少ぞ、一一盤中

一珠）（『翰林五鳳集』卷十六）。

○牧童 牧畜を行う子供。唐・王維「淇上田園即事」に「牧童望村去、獵犬隨人還。（牧童村を望みて去り、獵犬人に隨ひて還る）」。南宋・

陸游「秋思絕句六首」其一に「煙草茫茫楚澤秋、牧童吹笛喚歸牛。（煙草茫茫たり楚澤の秋、牧童笛を吹きて歸牛を喚ぶ）」。

○牛蹄 牛のひづめ。南宋・林希逸「郊行即事二首」其二に「老樹菌生鋪兔目、斷蹊泥濕印牛蹄。（老樹菌生じて兔目を鋪き、斷蹊泥濕ひて牛蹄を印す）」。

○加鞭 鞭打つて馬や牛を驅る。『續傳燈錄』卷二十四に「泥牛飲盡澄潭月、石馬加鞭不轉頭。（泥牛飲み盡くす澄潭の月、石馬鞭を加ふるも頭を轉ぜず）」とある。陸游「夜行」に「回首金牛道、加鞭負壯心（金牛道を回首し、鞭を加へて壯心を負ふ）」とある。

○過下流 川の下流を渡る。唐・張九齡「高齋閑望言懷」に「取路無高足、隨波適下流。（路を取るに高足無く、波に隨ひて下流に適く）」。

聖因『傳通記綱鈔』卷三十五に「大唐風俗曲水宴時、羽觴浮流。〔略〕若不得作詩時、徒亂桮酒過下流。下流人亦如是。〔大唐風俗曲水宴の時、羽觴の流れに浮かびて〔略〕若し詩を作るを得ざる時、徒らに桮の酒を亂して下流に過ぐ。下流の人も亦た是くの如し〕」とある。

▼通釋  
暮雨濕村橋（夕方雨が降つて村の橋を濕らす）  
川に隔てられている東と西にある村は近い。  
夕方の雲は雨を降らせて橋のあたりは濡れている。

牧童は牛の蹄が滑りやすくなることを心配して、牛の背中を鞭打つて驅りながら川の下流を渡つて行く。

▼参考 基熙の詩歌（「基熙公御詠草」〔資料番號〈60826〉〕）

暮雨濕村橋

霜にこそ跡をもみつれ暮かゝる雨さへさひし里の板はし暮にけり雨もふりきてのる駒のあをともしめる里の河はし

秋雨淋淋天欲暮 秋雨淋淋たり天暮れんと欲し

笮橋寂寂客行稀

笮橋寂寂たり客行稀なり

村歌牧笛無餘韻

村歌牧笛 餘韻無く

蒼袂牽牛相喚歸

蒼袂牛を牽きて相喚びて歸る

195謹奉和陽明殿下春日法樂之和歌之末字

廟容欲謁入禪齋

●○●●●●○○

高步移降雲月階

○●○●○●●○○

眞語實言三十一

●○●●○○●●○

感通尚識在神懷

●○●●●●○○

▼詩型 七言絶句 ▼韻字 齋・階・懷（平水韻上平聲九佳韻）

▼訓讀

謹んで陽明殿下春日法樂の和歌の末字に和し奉る

廟容謁せんと欲し禪齋に入り 高歩して移り降る雲月の階

眞語實言三十一 感通尚ほ識る 神懷に在ると

○陽明殿下春日法樂之和歌之末字 基熙の春日社法樂の和歌の末字に

▼注

和し、195番詩が作られたと解せる。基済歌は不明。末字は195番詩の韻

字「懷」か。「春日」は、大和國御蓋山の麓に鎮座する春日社（現在の奈良縣奈良市）のこと。藤原氏の氏神。法樂は、讀經・奏樂などにより神佛をなぐさめること。ここでは、基済が春日明神に和歌を奉納したことをいう。前後の配列により、195番詩は元祿十二年（一六九九）閏九月二十八日より同年十月七日までに詠まれたと推定する。

○廟容 「廟」は「たまや。靈屋。神靈をまつり拜するところ。靈廟。」（『禪學大辭典』）。「容」はかたち、すがた。「廟容」は社殿の様子をいう。「春日造」で知られた春日社本殿の威容を連想させるか。

○禪齋 禪室のこと。「齋」は靜肅な室（『禪學大辭典』）。瑞溪周鳳〔次韻雲漢郁侍者并序〕に「峨山深處出迦文。往歲傾心于闐君。應是禪齋赴清供。靈蕪一熏起黃雲。（峨山深き處出迦文。往歲傾心す于闐の君。應に是れ禪齋清供に赴くべし。靈蕪一熏黃雲を起こす。）」（『翰林五鳳集』卷二十八）。

○高歩 世俗を超えて生きること。「孤鶴斜飛山月境、雙龍高步嶺雲途。（孤鶴斜飛す 山月境、雙龍高步す 嶺雲の途）」（『和漢名所詩歌合』五十二番左・蜀郡・102）。「一千龍象隨高步 萬里香花結勝因（一千の龍象 高歩に隨ふ 萬里の香花 勝因を結す）」（『傳九裴休贈黃巒詩』）（『點鐵集』）。

○雲月階 「雲月」は雲と月。一休宗純『狂雲集』下巻「亂中大嘗會」の「當今聖代百王蹤、玉體金剛平穩容、風吹不動五雲月、雪壓難摧萬歲松。（當今聖代 百王の蹤、玉體金剛 平穩の容、風吹きても動かず 五雲月、雪壓ふとも摧き難し 萬歲松）」のように、貴顯をあら

わすか。

○眞語實言三十一「眞語實言」はまことのことば。『織田佛教大辭典』の「眞語」項に「眞如一實の理を説く語なり。是れ台密の義又如來の隨自意説にして、毫も他の爲めに曲示することなき實語を云ふ」。『捨藻抄』第十雜下482に「眞語者」として「などかまたたのむこころのなかるらむいっぽりならぬのりのまことを」。『經旨和歌』65に詞書「詠阿彌陀經和歌、說誠實言」、作者「淨阿」で「偽の言の葉ならぬことの葉と皆數數にとく御法かな」。「三十二」は基済の和歌をいう。

○感通 思いが他に通じること。「潛心默禱若有應、豈非正直能感通。（潛心默禱若し應有らば、豈に正直能く感通するに非ずや）」（韓二）（『點鐵集』）。

○神懷 春日明神の御意。

▼通釋

謹んで陽明殿下の春日法樂和歌の末字に和し奉った詩

陽明殿下が社殿のさまを拜しようとしたとき、禪齋へお入りになつた。

高歩して雲月の階を移り降りなさる。

真心のこもつた三十一文字であることよ。  
思いは通じ、はつきりとわかるのだった、きっと春日明神の思ひ召しがあるだろうと。

（川崎）

196 夏地儀 初冬七日會於芳春

三千尺落梅天瀑 ○○●○○○●○○  
瀑布懸邊山更青 ●●○○○●○○

一點炎塵飛不到



恰斯李白畫圖屏



▼詩型 七言絕句（起句末踏み落とし）

▼韻字 青・屏（平水韻下平聲九青韻）

「瀑」は同字重出の禁を犯しているが、蟬聯體の意圖があつたか。

▼訓讀

夏地儀 初冬七月、芳春に會す

三千尺落つ 梅天の瀑 瀑布懸る邊 山 更に青し

一點の炎塵 飛びて到らず 恰も斯れ李白畫圖の屏

▼注

○夏地儀 和歌題。堂上歌人の類題撰集『新明題和歌集』（寶永七年

〔一七一〇〕刊）にも卷二夏部の題のひとつに掲げられる。

○初冬七日會於芳春 元祿十二年（一六九九）十月七日、基熙は芳春院に出向き、觀音懺法を執行させた後、當座二十首詩歌會を催した。『基

熙公記』同日條によると、詩は一乘院宮眞敬親王、陽岑宗昕（大徳寺二百六十四世、萬里小路雅房二男）、桂嶽宗芳、梅堂義琇（大徳寺二百八十八世）、雲秀宗台（大徳寺二百九十九世、芳春院第七世）の五名で各二首、和歌は基熙二首のほか、裏松意光、平松時方、石井行康、櫛笥隆幸、進藤長之（近衛家諸大夫）、今大路孝在（近衛家諸大夫）、爲溪以首座の八名各一首。出題基熙で、四季に「天象」「地儀」「植物」「動物」「祝」を組み合わせた二十首題。桂嶽宗芳の196「夏地儀」詩及び197「冬植物」詩と基熙の「春天象」「冬動物」歌が残る。（▼参考）

○三千尺落 三千尺は九三〇メートル餘り。高みから勢いよく流れ落

ちることを言う。196番詩は、唐・李白の「望廬山瀑布」（廬山の瀑布を望む）を踏まえており、「三千尺」はその轉句「飛流直下三千尺」に採る。月舟壽桂の「瀑井鷺」詩にも「六月廬山暑氣微。瀑花觸石雪霏霏。銀河倒落三千尺。濺沫知成白鷺飛。（六月廬山暑氣微なり。瀑布に觸れて雪霏霏たり。銀河倒に落つ三千尺。濺沫白鷺と成りて飛ぶを知る）」（『翰林五鳳集』卷五十）とあり、夏景として詠じてゐる。

○梅天 梅雨の空。五月の異名。李白「望廬山瀑布」詩の起句「日照香爐生紫煙（日は香爐を照らして紫煙生ず）」を踏まえたものと考え、ここでは夏の青空と解した。『三體詩』に收録される唐・竇常の「北固晚眺」詩に「水國芒種後、梅天風雨涼。（水國芒種の後、梅天風雨涼し）」とあり、「素隱抄」は「五月の節に入ての後に、黃梅の雨も晴れたる時分に、此の山にのぼりたれば、四方の氣色が、清涼とそ」と解している。

○瀑・瀑布 瀧。李白「望廬山瀑布」詩の第二句に「遙看瀑布挂長川（遙かに見る瀑布の長川を挂くるを）」とある。雪嶺永瑾の「李白看瀑圖」詩には「未記廬山有瀑布。此名初自謫仙傳。（未だ記せず廬山に瀑布有りと。此の名初めて謫仙より傳ふ）」（『翰林五鳳集』卷六十）とあり、李白の廬山瀑布の詩は特別なものとして認識されていたようである。

○山更青 山がいよいよ青い。宋末元初・衛宗武の「初夏登北山」詩に「雷復陽初長、雪消山更青。（雷復びして陽初めて長く、雪消えて山更に青し）」とある。

○炎塵 热い塵。盛夏の暑さをいう。策彦周良の「金團扇之贊」に「風

人清氣屬君乎。三伏炎塵一點無。(風人の清氣君に屬するか。三伏の

炎塵一點も無し)」(『翰林五鳳集』卷五十)とある。

○李白畫圖屏 李白の詩や傳承に材をとる繪畫は少くないが、ここの

では「廬山瀑布圖」もしくは「李白看瀑布圖」を描いた屏風であろう。

風景が屏風の繪のようだという例には釋蓮禪「乘舟到新宮湊(舟に乗り新宮の湊に到る)」詩の「渡口宿時望地形、幽奇旁似畫圖屏。(渡口

に宿る時 地形を望めば、幽奇なること<sup>あまね</sup>よく畫圖の屏に似たり)」(『本朝無題詩』卷七)がある。

#### ▼通釋

夏地儀 十月七日、芳春院における會

三千尺の高みから落ちてくる 夏の青空にかかる瀧、

その瀧が掛かっているところは 山がいよいよ青い。

熱い塵は少しも飛んでこない。

ちょうど李白の詩を描いた屏風のようだ。

#### ▼参考(1) 『基熙公記』元祿十二年十月七日條

：未下刻事終、其後、有詩哥會、余出題、隨身短尺、酉刻探題廿首、戌刻各詠出、甚有興、其後言談數刻、亥半刻令歸華了、〔略〕

詩哥人數、一乘院宮、陽岑、桂嶽、梅堂、台首座、以上詩各二首、

和哥人數、余二首、裏松中納言、右衛門督、行康朝臣、隆幸、長之、孝在、爲溪、以首座、各一首、

和哥題、四季、天象、地儀、植物、動物、祝也、：

#### ▼参考(2) 「基熙公御詠草」(資料番號〈60827〉)

#### 春天象

△曙やのとかにみえてくる春の色もわかる、峰の横雲

朝な／＼立そふ春の霞にものとかなる世の風そしらるゝ

#### 冬動物

△降まゝに汀葦邊も埋れてたつもあさるも雪の白鷺

△はかなくもこの身のもとめやまさるや冬の嵐をわひて鳴らし

(松尾)

#### 197 冬植物

梅度寒香門外橋

當檐松嶺想孤標

階前三尺黃昏雪

官駕迎來竹折腰

○●○○●●○○

○○○○●○○○

○●○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

#### 冬植物

梅度寒香門外橋

當檐松嶺想孤標

階前三尺黃昏雪

官駕迎來竹折腰

○●○○●●○○

○○○○●○○○

○●○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

#### 冬植物

梅度寒香門外橋

當檐松嶺想孤標

階前三尺黃昏雪

官駕迎來竹折腰

○●○○●●○○

○○○○●○○○

○●○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

○○○○●●○○

様、歲寒三友圖を念頭に詠まれたか。

○寒香 寒さの中に咲く梅の花の清らかな香り。北宋・林逋「梅花三首」其三に「小園煙景正淒迷、陣陣寒香壓麝臍。(小園の煙景 正に淒迷たり、陳陣たる寒香麝臍を壓す)」とある。

○門外橋 門の外にかかる橋。ここでは芳春院外、大徳寺内の「梅橋」を指すか。『都林泉名勝圖會』(寛政十一年〔一七九九〕刊)卷一に大徳寺十境の一つに數え、「古梅ありて官池に横たゞ、橋を架すが如し、故に名とす」と解説する(『新修京都叢書』第九卷)。官池も十境の一つ。南宋末元初・方回「題王起宗大横披水墨作遠淡勢(王起宗大の横披の水墨、遠淡の勢を作すに題す)」詩に「卧龍峰下草廬幽、門外橋横水自流。(卧龍峰下 草廬 幽にして、門外橋横 水 自ら流る)」とある。

○當檐 軒先に見える。北宋・文彥博の「題中山郎中華嚴川墅(中山郎中の華嚴川墅に題す)」詩に「流泉清遠砌、列岫翠當簷。(流泉清くして砌を遶り、列岫翠にして簷に當たる)」とある。

○松嶺 松の生えた山。芳春院の松林、大徳寺十境の古巖松や官池の五老松など、大徳寺の松の高木はいくつかあるが、「嶺」字を實景とすると、芳春院から東に眺める松ヶ崎をいうのであろう。唐・武元衡「春題龍門香山寺」詩に「清景乍開松嶺月、亂流長響石樓風。(清景乍ち開く松嶺の月、亂流長く響く石樓の風)」とある。

○孤標 ひとつ高くそびえていること。また、人の高潔さを形容する。ここでは松を見て、基済の人柄を連想するというのであろう。唐・釋皎然の「詠煙上人座右畫松(煙上人座右の畫松を詠ず)」詩に「眞樹

孤標在、高人立操同。(眞樹 孤標在り、高人操を立つること同じ)」とある。

○三尺 一メートル弱。雪が深いことをいう。横川景三「賦曉雪(曉の雪を賦す)」詩に「莫掃堦前三尺雪、履痕留得到天明。(掃くこと莫かれ堦前三尺の雪、履痕留め得て天明に到る)」(『翰林五鳳集』卷二十二)とある。

○黃昏雪 夕方の雪。蘭坡景蘚「梅梢新月」詩に「黃昏雪似爲梅晴。月在寒梢疏處清。(黄昏の雪は梅の爲に晴るるに似たり、月は寒梢に在りて疏處に清し)」(『翰林五鳳集』卷六)とある。

○官駕 朝廷の乗り物。ここでは基済を乗せた車のこと。月舟壽桂「山蟬吟晚樹(飛鳥井二樂軒來歌題)」詩に「山房只爲迎官駕、聽作松間喝道聲。(山房只だ官駕を迎ふるが爲に、聽きて松間喝道の聲に作す)」(『翰林五鳳集』卷十四)とある。あるいは梅・雪を受け、『宋史』卷二九八「李及傳」に「在杭州、……一日、冒雪出郊、眾謂當置酒召客、乃獨造林逋清談、至暮而歸。(杭州に在りて、……一日、雪を冒して出郊するに、眾當に置酒して客を召すべしと謂ふに、乃ち獨り林逋に造りて清談し、暮に至りて歸る)」とある故事を、基済と自らに擬えるか。

○竹折腰 竹が雪の重みでしなる。人が腰を曲げ頭を下げた姿にたとえる。萬里集九「芳林主盟叔悅座元禪師借簾懶之韻作雪詩余亦同之(芳林主盟叔悅座元禪師簾懶の韻を借りて雪の詩を作り 余も亦た之に同ず)」詩に「脩竹折腰縱學禮、梨花同色獨容盟。(脩竹は腰を折りて縱に禮を學び、梨花は色を同じくして獨り盟を容る)」(『梅花無盡藏』

第五）とある。

▼通釋

冬植物

梅はその清らかな香りが門の外の橋を渡つて漂い出で、軒端に見える松山高く抜きんでて、高潔な人を思わせる。

きざはしの前に三尺もの雪がつもつた夕暮れ、高貴なかたを乗せた乗り物を迎えて、竹も腰を曲げている。

（松尾）

198  
尋早梅

探尋不憚寒風惱



林下經過又水涯



清白一般難辨處



奇芬匿在雪花枝



▼詩型 七言絕句 ▼韻字 涯・枝（平水韻上平聲四支韻）

▼訓讀

早梅を尋ぬ

林下 經過 又た水涯

探尋 憚らず 寒風の惱ますことを

奇芬 匿れて雪花の枝に在り

▼注

○尋早梅 早咲きの梅の花を探す。「早梅」は冬の景物として詠まれる。

南宋・陸游「初冬」詩に「更寬十日可閑出、會挈一壺尋早梅。（更に十日を寬くして閑出すべし、會ず一壺を挈げて早梅を尋ねん）」（『劍南詩藁』卷八十五）。月舟壽桂の詩に「山似岐陽寒意催、秋風九月雪

成堆。黃花節後無顏色、笑掃竹籬尋早梅。（山は岐陽に似て寒意催し、秋風九月雪堆を成す。黃花の節後顏色無く、笑ひて竹籬を掃き早梅を尋ぬ）」とある（『翰林五鳳集』卷二十）。和歌題「尋早梅」としては、三條西實隆歌「いかにせん立枝をみるも雪の宿しるへなるへき梅か、はなし」（『再昌草』卷二十六 大永六年・5153）の例がある。

○探尋 探し尋ねる。宋・王灼「與諸友游楊氏池上呼王隱居小飲晚登

書臺（諸友と楊氏の池上に游びて王隱居を呼び小飲して晩に書臺に登る）其一に「微風度竹氣、澹煙增樹色。探尋得佳境、灔澦一池碧。（微

風竹氣度り、澹煙樹色を増す。探尋して佳境を得、灔澦たる一池の碧）……」。

○不憚 厥わない。恐れない。唐・孟浩然「陪張丞相自松滋江東泊渚宮（張丞相に陪し松滋江より東して渚宮に泊す）」詩に「放溜下松滋、登舟命楫師。詎忘經濟日、不憚沝寒時。（放溜して松滋を下り、舟に登り楫師に命ず。詎んぞ忘れん經濟の日、沝寒の時を憚らず）」。

○寒風惱 村菴（希世靈彥）の詩に「雪山坐雪瞿曇老、鈍工夫被春風惱。（雪山雪に坐して瞿曇老い、鈍工夫は春風に惱まさる）」（『翰林五鳳集』卷五十七。後半二句殘欠あり）とある。

○又水涯 またも川岸に出る。元・仇遠「游天竺三首」其一に「行徧山巔又水涯、尙無紅葉與黃花。（行きて山巔を徧くして又た水涯、尙ほ紅葉と黃花と無し）」（『山村遺集』）。

○清白 汚れのない白。明・張天賦「爲毛暘谷進士題風煙雪月梅卷（毛暘谷進士の爲に風煙雪月梅卷に題す）四首」其四「月梅」詩に「牆角吐暗香、清白居上品。（牆角暗香を吐き、清白上品に居る）」。虎闘師

鍊「梅花」詩に「他後調羹附雨露、可將清白寄巖巒。（他後調羹雨露に附し、清白を將て巖巒に寄すべし）」（『翰林五鳳集』卷七）。

○一般 同じように。下句の「雪」と同様に清白という意味。宋・王銓「僕在會稽泛舟至剡中（僕會稽に在りて舟を泛べて剡中に至り）云々

四絶句」其四に「梅英與雪一般色、不得北風香不知。（梅英雪と一般の色、北風を得ざれば香は知らず）」（『剡錄』卷七）。月舟壽桂「春雪灑花」詩に「千紅萬紫一般白、籬爲難埋唯暗香。（千紅萬紫一般白く、籬は埋め難きが爲に唯だ暗香あるのみ）」（『翰林五鳳集』卷四）。

○難辨處 判斷がなかなか附かない。唐・陶翰「柳陌聽早鶯（柳陌に早鶯を聽く）」詩に「……閒關難辨處、斷續若頻驚。（閒關辨じ難き處、斷續して頻りに驚くが若し）」。九鼎竺重「益水」詩に「濫觴元在一毫頭、漲起波瀾漫四洲。鹽味膠青難辨處、何曾消滴混常派。（濫觴元一毫頭に在るも、波瀾を漲り起こし四洲に漫たり。鹽味膠青（語義未詳）辨じ難き處、何ぞ曾て消滴（語義未詳）常派に混ぜんや）」（『翰林五鳳集』卷三十六）。處の字義存疑。

○奇芬 すばらしい芳香。唐・韓愈「醉贈張祕書」詩に「東野動驚俗、天葩吐奇芬。（東野（孟郊の字）俗を動驚し、天葩（奇芬を吐く）」。虎

關師鍊「紅白梅」詩に「花木以來是逸羣、黃昏月下有奇芬。傳聞南北贊寒暖、素雪絳霞一樹分。（花木以來是逸羣、黃昏の月下に奇芬有り。傳へ聞く南北寒暖を贊ふるも、素雪絳霞一樹に分かる）」（『翰林五鳳集』卷七）。

○匿在 隠れてゐに存在する。散文の表現として用いる。

○雪花枝 南宋・王十朋「卧龍山有武侯新祠再用前韻」詩に「龍蛇樹

影搖千尺、玉雪花枝吐萬層（龍蛇の樹影千尺を搖らし、玉雪の花枝萬層に吐く）」。

### ▼通釋

早咲きの梅を探して

探し尋ねるには冷たい風に吹かれることも厭わず、林をくぐり抜け、またもや水邊に出た。

無垢の白さは、雪と同じようなので見分けにくいけれども、えも言えぬ馨しさは雪を被つて隠れた花の枝にあっても漂つてくるようだ。

（芳村）

199 陽明殿下 北政所得支撐南京大佛銅像古材、而命工匠彫刻靈

像、持念且使野衲開光點眼

千尺遮那大佛身



化身百億入微塵



圓音授記優填像



末法世間轉法輪



▼詩型 七言絕句 ▼韻字 身・塵・輪（平水韻上平聲十一真韻）

### ▼訓讀

陽明殿下の北政所、南京大佛の銅像を支撑せし古材を得て、工匠に命じて靈像を彫刻せしめ、持念し、且つ野衲をして開光點眼せしむ

千尺の遮那 大佛身 化身は百億の微塵に入る  
圓音にて授記す優填の像 末法世間の轉法輪

▼注

武后身 今上の台、南京古像 重ねて粧せられ來たる)」などの用例がある。

○北政所 近衛基熙室、品宮常子内親王（一六四二—一七〇一）。後水尾院皇女。母は園基音女（新廣義門院）。靈元院同母姉。寛文四年（一六六四）六歳年下の基熙に降嫁した。近衛家熙および近衛熙子（第六代將軍徳川家宣御台所、天英院）の母。寛文六年正月から元祿十三年（一七〇〇）三月二十四日までの『无上法院殿御日記』が残されている。本偈頌に記される彫像については未見。大佛と大佛殿の修復は、

貞享元年（一六八四）に勸進活動を開始した公慶上人の手によって進められた。大佛の修復は、元祿四年に完成し、翌五年に開眼供養が行われた。『後水尾天皇實錄』の「皇子貞敬親王」項、宮内廳書陵部藏『東大寺大佛開眼供養記』、『基熙公記』・『堯恕法親王日記』元祿五年三月二十五日條に據れば、興福寺一乘院門跡である貞敬親王が東大寺大佛供養の導師（第二十日「法華千部經供養法式」の導師）を務めた。ちなみに開眼の導師は靈元院皇子の勸修寺宮濟深親王が務めた。また、このとき用いられた願文と呪願文は近衛家熙筆（『基熙公記』・『无上法院殿御日記』元祿五年三月二十三日條）。續いて將軍・徳川綱吉を大檀那として大佛殿の再建も進められることとなつた。大佛殿は、公慶上人の勸進活動への幕府公許が得られたのち、寶永六年（一七〇九）に完成、同年三月に落慶法要が行われた。公慶上人没後、四年が経過していた。

○南京大佛 南京は南都。奈良の東大寺大佛。西胤俊承「奉賀相府重粧東大寺大佛丁酉七月三日（相府の重ねて東大寺大佛を粧せらるるを賀し奉る 丁酉七月三日）」に、「聖武后身今上台、南京古像重粧來。（聖

○支撐 支えること。北宋・蘇舜欽「遊山」に「竹木互支撐、小閣架險梯（竹木互ひに支撐し、小閣に險梯を架す）」とある。『朱子全書』卷九「大學三」に「教他撐天拄地（他をして天を撐え、地を拄えしむ）」とあり、この表現は『碧巖錄』などにも引用され、禪林でも廣く知られる語彙となつた。

○野衲 田舎者の僧侶。禪僧が頻用する謙讓表現。愚僧。

○開光點眼 新造した佛像の眼に點を打ち、魂を入れる儀式。開眼。

○古材 東大寺の大佛は蓮瓣をかたどった台座に鎮座しているが、その台座を支えていた古材の意味であろう。名刹の古材は好事家に珍重され、江戸時代にはしばしば佛具や茶道具などに轉用されていた。

○千尺 誇張表現。實際の東大寺の大佛は十五メートルほどなので、五十尺に満たない。唐の則天武后が建立したとされる洛陽の白司馬坂大像が高さ千尺と言わわれているのに倣つたか。

○入微塵 佛語。「一微塵ほどの狭い所で行うような、わずかな仕事」の意味。道元禪師の『典座敎訓』に「拈一莖草、建法王刹、入一微塵、轉大法輪。（一莖草を拈じ、法王刹を建て、一微塵に入り、大法輪を轉ぜよ）」などの用例がある。

○圓音 佛語。「完全なる音色」の意味で、すべての人々が理解可能な完全なる説法を言う。「圓音」が初めて用いられたのは、『大乗起信論義記』とされ、インド撰述の經典では、漢譯でもこの語が用いられることはないとされる（吾妻重一・井上克人・丹治昭義『大乘起信

論義記』研究(二)」『關西大學東西學術研究所紀要』第三十三輯二〇〇〇年三月)参照。覺範慧洪の別集『石門文字禪』所收「大鴻山外侍者求詩(大鴻山の外侍者詩を求む)」に「大鐘日夕撞、圓音山川。(大鐘 日夕に撞けば、圓音 山川に答ふ)」とある。

○授記 佛語で、佛が修行者に對し、將來必ず佛となることを豫言し保證を與えること、またはその内容。

○優填像 優填は「優填王」。インドの憍賞彌(こうさんび)國の王で、王妃の勸めにより、佛法に歸依し、釋迦を思慕し、牛頭栴檀(牛頭山)でとれたという香木)で佛像をつくらせたという傳承がある。その佛像は、「優填王思慕像」とされ、平安時代中期の東大寺の學僧、奐然が中國から持ち歸り、嵯峨清涼寺に安置したとして、日本でも廣く信仰されていた。

○轉法輪 佛語で、佛が教えを説くこと、または優れた說法そのものを言う。第二句と同様、道元の用例が参考になる。

### ▼通釋

陽明殿下の北政所は、南都東大寺の大佛の銅像を支えていた古材を入手し、工匠に命じて新たな佛像を彫造させ、持念し、さらに愚僧に開眼を命ぜられたのである。

千尺を誇る偉容の大佛、佛の化身はそもそも百億もの人人のわずかな仕事の積み重ねで完成したものでありました。釋迦の優れた說法は、優填王思慕像にも劣らない北政所の佛像を通じて傳わるようで、眾生に後世を約束してくるのでしょうか、末法のこの世で佛の尊いおことばを聞くように思われます。

(中本)

205 暮春十有九日、應陽明殿下之齋請、亭午飯食茶菓訖、以樂

天句爲題有台詠。野納亦稟命賦唐詩。詩就有餘興、優婆塞戒爲題、再賦。

萬緣皆已消

天台南嶽芒鞋破

祖席住山事更多

解印歸來林下屋

安眠高臥對山阿

▼詩型 七言絕句 ▼韻字 多・阿(平水韻下平聲五歌韻)

▼訓讀

暮春十有九日、陽明殿下の齋請に應じ、亭午に飯食茶菓訖はり、

樂天の句を以て題と爲し台詠有り。野納も亦た命を稟けて唐詩を賦す。詩就りて餘興有り、優婆塞戒を題と爲し、再び賦す。

萬緣皆已に消ゆ

天台南嶽芒鞋破る

祖席住山事更に多し

印を解き歸り来る林下の屋

安眠高臥山阿に對す

▼校異

「祖席住山事更多」は、『基熙公記』に「祖席住山事更繁」に、「安眠高臥對山阿」は、『基熙公記』に「爐香一炷坐當軒」を作る(▼参考(1))。

▼注

○暮春十有九日 元祿十三年(一七〇〇)三月十九日。『基熙公記』同日條に、桂嶽宗芳が來邸し、午時齋ののち、樂天句題の詩哥があつ

たと記す。205番詩はこのときの作。基熙も同題で和歌二首を詠んだ。

續けて優婆塞戒題の206・207・208・209・210番詩を賦した。(▼参考)

○齋請 食事を供するため僧侶を招くこと。ここでは亭午(正午)の齋。

○樂天句 白居易「山中獨吟」詩「人各有二癖、我癖在章句。萬縁皆已消、此病獨未去。每逢美風景、或對好親故。高聲詠一篇、悅若與神遇。自爲江上客、半在山中住。有時新詩成、獨上東巖路。身依白石崖、手攀青桂樹。狂吟驚林壑、猿鳥皆窺覷。恐爲世所嗤、故就無人處。(人には各おの一癖有りて、我が癖は章句に在り。萬縁皆已に消ゆるも、此の病のみ獨り未だ去らず。美風景に逢ふ毎に、或いは好親故に對し、高聲一篇を詠すれば、悦たること神と遇ふが若し。江上の客と爲りてより、半ばは山中に在りて住む。時有りて新詩成れば、獨り東巖の路に上る。身は白石崖に依り、手もて青桂樹を攀ぐ。狂吟して林壑を驚かしめ、猿鳥皆窺覷す。恐世の嗤ふ所と爲るを恐れ、故に人無き處に就く」(『白氏文集』卷七)の第三句を指す。慈圓の和歌「皆人に一のくせは有るぞとよこれをばゆるせ敷島の道」(『清巖茶話』)。

○優婆塞戒 「男性の在俗信者のたもつべき戒めで、殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒の五つのあやまちを禁制する」(『佛教語大辭典』)。

○萬縁 すべての因縁。眾縁。

○天台 浙江省台州市天台縣の山。佛教の聖地の一つで、智顥(五三八—五九七)がここで天台宗を開いた。

○南嶽 湖南省衡陽市山、衡山。五嶽の一つであるが、また佛教の聖地の一つでもあり、禪宗七祖の懷讓が福嚴寺に道場を開いた禪宗に

おいても重要地である。

○芒鞋 わらじ。南宋・韓元吉「僧仲儼芥室」詩に「脚底芒鞋破、顧邊衲被寒。(脚底芒鞋破れ、顧邊衲被寒し)」(『南澗甲乙稿』卷三)。宋・

釋覺範「超然在東華作此招之(超然の東華に在りて此を作り之を招く)」詩に「芒鞋踏破成何事、坐榻塵埋只汗顏。(芒鞋踏み破れ何事をか成す、坐榻塵に埋もれ只だ汗顏)」(『石門文字禪』卷十五)。

○祖席 餞行(はなむけ)の宴席。杜甫「送許八拾遺歸江寧觀省(許八拾遺の江寧に歸り観省するを送る)……」詩に「聖朝新孝理、祖席倍輝光。(聖朝新に孝理し、祖席倍ます輝光す)」(『集千家註杜工部詩集』卷四)。

○住山 山間に居住する。佛僧、道士、隱者の行爲として詩に多く詠まれる。唐・李商隱「別智玄法師(智玄法師に別る)」詩に「雲鬢無端怨別離、十年移易住山期(雲鬢 端無くも別離を怨み、十年 移易す住山の期)」。蘭坡景菴「新山山長太寧老人、……」詩に「老去住處に就く」(『白氏文集』卷七)の第三句を指す。慈圓の和歌「皆人に一のくせは有るぞとよこれをばゆるせ敷島の道」(『清巖茶話』)。

意か。

○解印 官印の印綬をはずす。官職を辭すこと。元・貢性之「陶靖節像」詩に「解印歸來尙黑頭、風塵吹滿故園秋(印を解き歸り来れば尙ほ黒頭、風塵吹き満つ故園の秋)」(『元詩選』二集卷二十二)。梅心

正悟「淵明臥北窗圖」詩に「解印歸來五柳翁、占涼高臥北窗中。(印を解き歸り来る五柳の翁、涼を占め高臥す北窗の中)」(『翰林五鳳集』卷五十九)。また、『桂芳集』33番「再用前韻爲四絕以奉呈」其四に「喜

聞甘作臥雲身、解印休官有幾人。翠竹白沙漁夫宅、三公不換此江濱。(喜び聞く　甘んじて作る臥雲の身、印を解き官を休む　幾人か有る。翠竹　白沙　漁夫の宅、三公にも換へず　此の江濱)とある。この絶句と205番詩後半によれば、桂嶽は仕官の後に佛門に入つたか。病弱なために青雲の志を遂げられず、出家逝世したことは、31番「病中偶成」詩の「雲志難攀蒲柳質、一生好作臥雲身。(雲志　攀ぢ難し　蒲柳の質、一生好んで作る　臥雲の身)」から推測できる。なお、桂嶽は石井氏の次男として明暦二年(一六五六)に生まれ、名は點であつた。<sup>232</sup>番「崇正贊」に亡母(法名崇正)が病で卒去した萬治元年(一六五八)

「千時<sup>點甫</sup>三歳」と記す。また、兄は「九條幕府家臣石井右金吾校尉宇治金利」であることが、284番「駒込別荘十景」の「水戸黄門公畫武陵駒込別荘十景朱栢記」にある「石井、余家氏也。金吾、

余家兄也」という記述より知られる。

○林下屋 林の中にある家屋。元・于石「宿棲眞院分韻得獨字(棲眞院に宿り分韻して獨字を得たり)」詩に「偶隨白雲去、棲此林下屋。(偶たま白雲に隨ひて去き、此の林下の屋に棲る)」(『元詩選』二集卷九)。江西龍派「林校夜諷」詩に「因記桃榔林下屋、蘇家逐客隔牆□。(因りて記す　桃榔　林下の屋、蘇家の逐客牆□隔つ)」(『翰林五鳳集』卷四十四)。

○安眠 心安らかに熟睡する。唐・白居易「快活」詩に「飽食安眠消日月、閑談冷笑接交親。(飽食安眠日月を消し、閑談冷笑交親に接す)」

『白氏文集』卷五十六)。『禪林集句』に「老倒疏懶無事日、安眠高臥對青山。(老倒疏懶無事の日、安眠高臥青山に對す)」。

○高臥 ゆつたりと身を横たえる。隱棲を指す。唐・盧照鄰「山林休日田家」詩に「還思北窗下、高臥偃羲皇。(還て思ふ北窗の下、高臥羲皇偃す)」。絶海中津(錢原和清溪和尚(錢原にて清溪和尚に和す)韻)詩に「青山高臥茅簷下、不許白雲知此心。青山に高臥す　茅簷の下、許さず　白雲の此の心を知るを)」(『蕉堅藁』、『翰林五鳳集』卷三十一)。

○對山阿 山の阿に向かう。元・傅若金「邯鄲行」に「何王墳墓對山阿、尙憶諸侯爭戰多(何の王の墳墓か山阿に對する、尙ほ憶ふ諸侯爭戰多きを)」(『傅與礪詩集』卷三)とある。

#### ▼通釋

萬縁皆已消(すべての因縁が消え去つた)

天台山、南嶺を經巡つてわらじが破れた。(それほどに修行を積んだ)はなむけの宴に出るのも一山に居住するのも煩わしい事がいっそう多い。

印綬をはずして山林の隠居に歸つて來てからは、

山の阿を目の前にして安らかに眠り、ゆつたりと寝る日日である。

#### ▼参考(1)『基熙公記』元祿十三年三月十九日條

桂嶽和尚來、有午時齋、其後相共有詩哥、消永日、晚鐘比桂嶽歸寺了、詩哥續加之、〔以下綴込詠草〕

暮春十九日應 關白殿<sup>下</sup>之齋請、亭午飯食茶果訖、以樂天句爲題、有台詠。野衲亦稟 命賦唐詩。詩就、有餘興、再奉 命相賦。優婆塞戒爲題。

天台南嶽芒鞋破、祖席住山事更繁、解印歸來林下屋、爐香一炷坐當軒  
優婆塞戒第一

不殺生戒

好生怖死凡情習、蠢動含靈其意均、體得古人護鵝念、九州四海總歸仁

不偷盜戒

貪心財欲海潮深、不與取之國有禁、大丈夫兒須慎獨、何爲曠野拾遺金

不邪淫戒

鼓琴鼓瑟事和順、貞靜幽閑是好逑、可不如禽邪慾輩、雎鳩雙翼在河洲

不妄語戒

一言已出駟難逐、利口害人鈍鎌鋤、君子從來不欺誑、周詩三百思無邪

不飲酒戒

斟無及亂世間教、出世門中豈濕脣、菩薩比丘諸細行、從斯一失失全真

愚詠如此

色よ香よしたふ心の花たにもはては我身に殘る物かは

松竹のみとりもえやは雲かせもなきたる空にむかふこゝろは

不殺生戒

後の世を照すいさりの光かはくるしきつりのいとなみなせそ

不偷盜戒

わかこゝろ花のあるしになしてみよゆるさぬ枝のおらるへきかは

不邪淫戒

行すりの袖にしはしのうつりかもうつすな心移りもそする

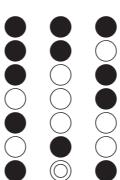
不妄語戒

206 不殺生戒

好生怖死凡情習

蠢動含靈其意均

體得古人護鵝念



思へ人世にしたかへは鹿をさして馬といはんもくるしかる身を  
不飲酒戒

よもすからすめるこゝろはくみもせて何所はえひのさか月の友  
▼参考(2) 基潤の和歌（「基潤公御詠草」）〔資料番号〈60837〉〕

萬縁皆已消

色よ香よしたふ心の花たにもはては我身に殘る物かは

松竹のみとりもえやは雲かせもなきたる空にむかふこゝろは

不殺生戒

後の世を照すいさりの光かはくるしきつりのいとなみなせそ

不偷盜戒

わかこゝろ花のあるしになしてみよゆるさぬ枝のおらるへきかは

不邪淫戒

行すりの袖にしはしのうつりかもうつすな心移りもそする

不飲酒戒

よもすからすめるこゝろはくみもせて何所はえひのさか月の友

(芳村)

九州四海總歸仁

●○●●●○○

▼詩型 七言絶句 ▼韻字 均・仁（平水韻上平聲十一真韻）

▼訓讀

不殺生戒

生を好み死を怖るは凡情の習ひ 蠢動含靈其の意均し

古人護鵝の念を體得せば 九州四海總に仁に歸せん

▼注

○不殺生戒 生き物の生命を絶つことを禁ずる戒。優婆塞戒のひとつ。

206 番詩はこれを題とする元祿十三年（一七〇〇）三月十九日の作。（205番詩▼参考）

○好生怖死 「好生」や「怖死」は内典にも見える措辭である。特に「好生」と「惡死」、「怖死」と「貪生」はしばしば組み合わせて用いられている。例えば、『楚石梵琦禪師語錄』卷三に「隨羣逐隊、怖死貪生。（羣に隨ひて隊を逐ふ、死を怖れて生を貪る）」とある。

○凡情習 「凡情」は凡人の心情をいう（『佛教語大辭典』）。一方で、宋代に成立した『楞嚴經要解』卷十六にある「人之情習、好生惡死。（人の情習は、生を好みて死を惡むことなり）」は206番詩と趣旨も共通する。「情習」は人間の實情と習慣をいう。「凡」は「凡夫」と捉えられよう。「凡情習」は漢詩の例を見いだせない。「凡情」と「情習」と兩方を掛けた作られたのであろう。

○蠢動含靈 一切の生物をいう（『佛教語大辭典』）。例えば、『黃檗斷際禪師宛陵錄』に「卽心是佛。上至諸佛。下至蠢動含靈。皆有佛性。同一心體。（卽心是佛。上は諸佛に至り、下は蠢動含靈に至り、皆佛事、萬歳千秋樂未央。（九州四海に常に無事たり、萬歳千秋樂しみ未

性有り、心體を同一とす）」とある。「蠢動含靈」は「諸佛」と對照的な存在とされている。また、『夢中問答集』（國立國會圖書館藏寛永年

開刊古活字版）に「白性天眞ノ如來ヲ信スル人ハ、三身四智ヲモ貴シトセス、蠢動含靈ヲモ賤トセス」とある。「三身」「四智」はそれぞれ

佛の三種の身、佛の智慧を指すが、それらを尊ばないといふ。對して、「蠢動含靈」、即ちすべての生物を賤しいとしないと述べられている。

206番詩の「蠢動含靈」は題の「不殺生戒」に照應し、特に人間以外の生物という意味合いで用いられているのであろう。

○其意均 その（命を惜しんで死を恐れる）氣持ちが同じ、の意。ここで「均」は同じであることをいう。宋・陸游「坐客有談狄魚眼眶之美者感嘆而作（坐客に狄魚の眼眶の美を談ずる者有り。感嘆して作る）」

に「物生怖死與我均、砧几流丹只俄頃。（物生まれて死を怖るるは我と均しく、砧几に丹を流するに只だ俄頃なるのみ）」とある。

○體得 十分に會得して自分のものとすることをいう（『大漢和辭典』）。『宗鏡錄』卷六に「無心始體無心道、體得無心道也休。（無心始めて無心の道を體し、無心を體得せば道また休す）」とある。

○古人護鵝念 『大莊嚴論經』卷十一に見える鵝を護る比丘の故事を踏まえている。『佛教大辭典』「護鵝」項に「比丘あり、鵝鳥の寶珠を呑むを知れども鵝鳥の殺されんことを恐れ、自ら其罪を負ふて鵝を救ふを念ずること」とある。『虛堂和尚語錄』に「護鵝之戒如雪、守臘之行若冰。（護鵝の戒 雪の如く、守臘の行 冰の若し）」。

○九州四海 天下の意。唐・盧照鄰「登封大酺歌」に「九州四海常無

だ央きぎ）」（『幽憂子集』卷三）とある。禪籍にも、『圓悟佛果禪師語錄』に「匝地普天皆承恩力、九州四海悉稟威靈。（匝地普天 皆恩力を承け、九州四海 悉く威靈を稟く）」の例を見い出せる。

○總歸仁 「總」はすべての意。「歸仁」はもともと仁徳仁政に歸附すること。『論語』顏淵に「顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。」一日克己復禮、天下歸仁焉。（顏淵仁を問ふ。子曰はく、己に克ちて禮に復るを仁と爲す。一日己に克ちて禮に復れば、天下仁に歸す）とある。

内典では、『無準師範禪師語錄』に「四海歸仁、萬邦入貢（四海歸仁し、萬邦入貢す）」とある。日本の例では、瑞溪周鳳編『善隣國寶記』に收められる應永十年（一四〇三）の足利義満による明永樂帝への上表文に「萬方嚮化、四海歸仁。（萬方化に嚮い、四海仁に歸す）」（田中健夫編『善隣國寶記 新訂續善隣國寶記』集英社 一九九五年）とある。一方、206番詩の「仁」は、「仁政」ではなく、すべての生物に對する慈しみを指す。「歸」は「歸依」と理解してよいであろう。

### ▼通釋

#### 不殺生戒

命を惜しんで死を恐れることは、凡人の心情である。  
生命のあるすべてのものには、同じ思いがある。

（寶珠を呑んだ）鵝鳥を護るあの比丘の思いを十分に會得することができれば、

天下はすべて仁慈（の佛法）に歸依するようになるのであろう。（高）

貪心財欲海潮深

○○○●●○○○

不與取之國有禁

●●○○○●●●

大丈夫兒須慎獨

○○●●●○○○

何爲曠野捨遺金

○○●●●○○○

▼詩型 七言絕句（第二句孤平）

○○●●●○○○

▼韻字 深・金（平水韻下平聲十二侵韻）

○○●●●○○○

▼訓讀 不偷盜戒

貪心 財欲 海潮深し

與へざるに之を取るは國に禁有り

大丈夫兒須らく獨を慎むべく

何爲れぞ 曠野に遺金を拾はん

▼校異 「何爲曠野捨遺金」は、『基熙公記』に「何爲曠野捨遺金」に作る（205番詩▼参考(I)）。

▼注

○不偷盜戒 他人のものを盜むことを禁ずる戒め。優婆塞戒のひとつ。『法界次第初門卷上之下』「五戒初門第十四」に「一不殺生戒、二不偷盜戒、三不邪婬戒、四不妄語戒、五不飲酒戒、〔略〕若在家佛弟子、破此五戒則非清信士女。故經云、五戒者天下大禁忌。〔略〕二不偷盜戒、云何名盜。知他物生盜心、取物去離本處物屬我、是名盜。若不作是事、名不偷盜戒。（一不殺生戒、二不偷盜戒、三不邪婬戒、四不妄語戒、五不飲酒戒、〔略〕若し在家の佛弟子、此の五戒を破れば、則ち清信の士女に非ず。故に經云ふ、五戒なる者は天下の大禁忌なり、と。〔略〕二不偷盜戒、云ふ、何ぞ盜と名づくと。他物を知りて盜心を生み、物を取り本の處を去り離れ、物、我に屬す。是れ盜と名づく。若し是の

事を作さざれば、不倫盜戒と名づく」とある。『正法念處經』『新學行要鈔』『諸回向清規』などにも「不倫盜戒」への言及がある。『狂雲集』に「不倫盜戒」という同題の詩がある。唐・敦煌歌辭「行路難共住修道八首」其七に「殺生偷盜皆計罪、地獄門前専相待。(殺生偷盜は皆罪を計へ、地獄門前 専ら相待つ)」とある。(205番詩▼参考)

○貪心 むさぼり求めて足ることを知らない心。欲深い心。貪欲な心。

唐・寒山「詩三百三首」其二百四十三に「見好埋頭愛、貪心過羅刹。(好きを見れば頭を埋めて愛し、貪心 羅刹に過ぐ)」とある。

○財欲 財寶をほしがる心。『佛說大乘菩薩藏正法經』卷三十一に「財欲又復同影像、迅速猛於弓箭勢。(財欲又復影像を同じくし、迅速なこと 弓箭の勢ひより猛し)」とある。

○海潮 海水。『大莊嚴論經』卷第一に「持戒如巨海、少欲如海潮。(戒を持すること巨海の如く、少欲海潮の如し)」とある。『正法念處經』卷第三十五に「爲欲蛇所蟄、欲如海潮波。(欲を爲せば蛇に蟄され、欲は海潮の波の如し)」とある。「海潮深」の用例はなかつたが、唐・鄭谷「贈日東鑑禪師(日東の鑑禪師に贈る)」に「故國無心渡海潮、老禪方丈倚中條。(故國無心にして海潮を渡る、老禪の方丈 中條に倚る)」(増注本『三體詩』)、絶海中津「送古心藏主歸天草舊隱(古心藏主の天草の舊隱に歸るを送る)」に「島樹深遮僊洞路、海潮直到寺門前。(島樹深く遮る僊洞の路、海潮直ちに到る寺門の前)」(翰林五鳳集) 卷三十三)とある。

○大丈夫兒 大丈夫。意志が強く、立派な男。「莫待臨時叫菩薩、大丈夫兒須豁豁。(時に臨んで菩薩を叫ぶそ待つこと莫れ、大丈夫兒

須らく豁豁たるべし)」(唐・一砵和尚「一砵歌」)、「劃開一路涅槃門、大丈夫兒須執捉。(一路を劃開す涅槃の門、大丈夫兒須らく執捉すべし)」(柳枝軒版『禪林集句』、無刊記本『句雙紙尋覓』)など、僧侶の詩作によく使われる。僧侶以外の詩では「大丈夫」の例が多い。

○慎獨 他人の見ていないところでも、心を正しくもつて行いを慎む。『大學』の「君子必慎其獨也(君子は必ず其の獨を慎む)」を踏まえる。北宋・邵雍「意未萌於心(意未だ心に萌さず)」に「君子貴慎獨、上不愧屋漏。(君子は慎獨を貴び、上に屋の漏るるを愧ぢず)」とある。『點鐵集』に「孔門慎獨三千士、朽木之譏白晝眠。(孔門慎獨 三千士、朽木の譏り 白晝の眠り)「圓十惰夫」」とある。

○曠野 廣廣とした原野。『詩經』小雅「何草不黃」に「匪兕匪虎、率彼曠野(兕に匪ず、虎に匪ず、彼の曠野に率ふ)」とある。唐・李頤「旅望」に「秋天曠野行人絕、馬首西來知是誰。(秋天曠野 行人絶え、馬首西より来る 知んぬ是れ誰ぞ)」(増注本『三體詩』卷一)。唐詩選』王昌齡「出塞行」および『點鐵集』「唐選七出塞行」は「馬首西來知是誰」の「西」を「東」に作る。)

○遺金 誰かが道で落とした金錢。人が遺失した金。『韓詩外傳』卷十「吳延陵季子遊於齊、見遺金、呼牧者取之。牧者曰、何子居之高、視之下。貌之君子、而言之野也。吾有君不臣、有友不友、當暑衣裘、吾豈取金者乎。(吳の延陵の季子齋に遊び、遺金を見て、牧者を呼び之を取らしむ。牧者曰く、何ぞ子の居ることの高くして、視ることの下なる。貌は君子にして、而るに言の野なるや。吾、君有るも臣たらず、友有るも友とせず、暑に當たつて裘を衣る。吾、豈に金を取る者

ならんや、と」という故事を踏まえるか。唐・方干「處州獻盧員外（處州にて盧員外に獻ず）」に「落地遺金終日在、經年滯獄當時空。（地に落つる遺金は終日在り、年を經る滯獄は當時空なり）」とある。

### ▼通釋

#### 不偷盜戒

欲深い心や財寶を欲しがる心は海の潮流のように深い。

（他人のものを）與えられない場合、勝手に取つてしまふと、國の法立派な男子は一人で過ごす場合も心を正しくもって行いを慎まなければならぬ。

どうして原野のような人がいないところで他人の落としたお金を持うことがあろうか（そういうことはきつとないであろう）。

（黄）

#### 208 不邪姪戒

##### 鼓琴鼓瑟事和順

貞靜幽閑是好逑

可不如禽邪慾輩

雎鳩雙翼在河洲

▼詩型 七言絕句（第一句末失韻）

▼韻字 迹・洲（平水韻下平聲十一尤韻）

### ▼訓讀

#### 不邪姪戒

琴を鼓し瑟を鼓し 和順を事とす 貞靜幽閑 是れ好逑

禽にも如かざる可し 邪慾の輩 離鳩 翼を雙べて河の洲に在り

▼校異 「不邪姪戒」は、『基潤公記』に「不邪淫戒」に作る（205番詩

▼参考(1)。

### ▼注

○不邪姪戒 不邪淫戒に同じ。「五戒または十善戒の一つ。夫が妻以外の女、または妻が夫以外の男と肉體關係を結ぶことや、夫婦でもよこしまな方法などで性交を行うことを禁ずる戒。」（佛教語大辭典）。

「不邪姪戒」を題とする和歌は『新古今和歌集』卷二十・釋教 1963・寂然法師の「さらぬだにおもきが上にさよ衣わがつまならぬつまなかさねそ」（『唯心房集』3にも入集）が知られる。基潤の和歌は「行すりの袖にしほのうつりにもうつすな心移りもそする」。208番詩は、基

潤の室、品宮常子内親王を稱揚し、夫妻の仲の良さを詠じたものであろう。（205番詩▼参考）

○鼓琴鼓瑟 夫婦仲がよいこと。『詩經』小雅「鹿鳴」に「我有嘉賓、鼓瑟鼓琴。鼓瑟鼓琴，和樂且湛。（我に嘉賓有り、瑟を鼓し琴を鼓す。瑟を鼓し琴を鼓し、和樂して且つ湛したまつたまつしむ）」とあるのは、友人についていう。ここでは『詩經』小雅「常棣」の「妻子好合，如鼓瑟琴。（妻子好合し、瑟琴を鼓するが如し）」、あわせて周南「關雎」の「窈窕淑女、琴瑟友之。（窈窕たる淑女は、琴瑟もて友しむ。〔琴瑟之を友とせむ〕」を踏まえる。後掲「好逑」項参照。

○和順 性質が穏やかであること。和らぎ從順である。『禮記』「昏義」に「教順成俗、外内和順、國家理治。（教順俗を成して、外内和順し、國家理治す）」とあり、「樂記」に「和順積中而英華發外。（和順中に

積みて英華外に發す」とある。

○貞靜幽閑 貞靜は心が正しくおだやかであること。南宋・釋文珦「湯婆」に「終宵暖吾足、貞靜無邪思。(終宵吾が足を暖め、貞靜にして思ひ邪無し)」とある。幽閑は奥深くて靜かなこと。南朝宋・顏延之「秋胡行」其一に「婉彼幽閑女、作嬪君子室。(婉たり彼の幽閑の女、嬪して君子の室と作す)」とある。この四字は「關雎」毛傳に「言后妃有關雎之德、是幽閑貞專之善女、宜爲君子之好匹(言ふところは、后妃に關雎の徳有り、幽閑貞專の善女、宜しく君子の好匹と爲るべし)」を受けるか。また、元・趙汸『周易文註』卷二「家人」の六二の爻辭「无攸遂、在中饋、貞吉。(六二、遂ぐる攸无し。中饋に在り。貞しくして吉)」に「柔順中正、是女子幽閑貞靜者(柔順中正、是れ女子の幽閑貞靜なる者)」とある。

○好逑 よい伴侶。良い妻。『詩經』周南「關雎」に「關關雎鳩、在河之洲。窈窕淑女、君子好逑。(關關たる雎鳩は、河の洲に在り。窈窕たる淑女は君子の好逑)」とある。

○不如禽 鳥も及ばない。白居易「慈烏夜啼(慈烏夜啼く)」詩に「嗟哉斯徒輩、其心不如禽。(嗟哉斯の徒輩、其の心は禽にも如かず)」とある。白居易詩は母子について言うが、208番詩は男女についていう。雎鳩が鳥であるのにかけて用いたか。

○邪慾 道徳に反した欲望。ここでは淫欲。『漢書』「外戚傳」下の、罪を問われた班婕妤の答えに「修正尙未蒙福、爲邪欲以何望。(正を修めて尙ほ未だ福を蒙らざるに、邪欲を爲して以て何をか望まん)」とある。『毛詩』大序に「關雎樂得淑女以配君子、憂在進賢、不淫其色。

(關雎は淑女を得て以て君子に配するを樂しみ、憂は賢を進むるに在りて、其の色に淫せず)」とある。

○雎鳩 みさご。貞節な鳥とされる。「毛傳」に「后妃說樂君子之德、無不和諧。又不淫其色、慎固幽深、若雎鳩之有別焉。(后妃は說びて君子の徳を樂しみ、和諧せざる無し。又其の色に淫せず、慎みて固より幽深なること、雎鳩の別有るが如し)」という。

○雙翼 一般的には鳥の二つの翼をいうが、ここでは二羽の鳥の羽。雌雄の雎鳩が羽をならべて飛ぶ比翼の意であろう。前漢・司馬相如「琴歌二首」其二に「交情通意心和諧、中夜相從知者誰。雙翼俱起翻高飛、無惑我心使余悲。(情を交え意を通じ 心 和諧せん、中夜相從はん知る者は誰ぞ。雙翼 併に起ちて翻つて高く飛ばん、我が心に感ずる無くんば余をして悲しましむ)」とある(「雙翼」に「雙興」の異文あり)。

#### ▼通釋

##### 不邪姪戒

琴瑟相和すように仲良く、穏やかに過ごす。

心正しく靜かで、よい伴侶である。

淫欲を持つやからは鳥も及ばない。

(貞節な鳥である) ミサゴが羽をならべて川の洲にいる(ような御夫妻の姿である)。

(松尾)



利口害人鈍鎧錚

●●●○●○●○

君子從來不欺詐

○●○○●●○○

周詩三百思無邪

○○○●●●○○

▼詩型 七言絕句 ▼韻字 錚・邪(平水韻下平聲六麻韻)

▼訓讀

不妄語戒

一言已に出れば駟も追ひ難し 利口人を害して鎮錚を鈍とす

君子從來 欺詐せず 周詩三百思ひ邪無し

▼校異 「一言已出駟難追」は、『基熙公記』に「一言已出駟難逐」に作る(205番詩▼参考①)。

○不妄語戒 嘘・偽りを言い、他人をあざむいてはいけないという戒め。『寶物集』卷五に「不妄語と申は、見たる事を見ずといひ、見ざる事を見たるといひ、すべて虚言をせぬを申たる也」とある。『増補俳諧類船集』「偽」項に「偽は佛書に説置る妄語戒と云もの也。人の言の葉うれしからましと詠じたるものとはり也」とある。209番詩に對應する基熙の「不妄語戒」歌は「思へ人世にしたかへは鹿をさして馬といはんもくるしかる身を」。秦の趙高が自分の權勢を試すために鹿を馬といつわって皇帝に獻上した故事(『史記』秦始皇本紀)を踏まえる。世に倣い鹿を馬と言ふことなどできない、爲政者は決して偽るわけにはいかないことを表現したか。(205番詩▼参考)

○一言已出駟難追 駟は四頭立ての馬車。一度口から出したことばは四頭立ての馬車で追いかけても追いつかない、轉じてことばは慎むべ

きであるの意。『論語』顏淵に「惜乎夫子之説君子也、駟不及舌。(惜しきかな、夫の子の君子を説くや。駟も舌に及ばず)」。唐・孟遲「寄浙右舊幕僚(浙右の舊幕僚に寄す)」に「由來惡舌駟難追、自古無媒謗所歸。(由來 悪舌 駟も追ひ難し、古へより 謗りの歸する所に媒する無し)」(『全唐詩』卷五百五十七)。支考『十論爲辨抄』(享保十年「一七二五」刊)の跋文に「我かつて此事をなげき、元祿遺集にあらためぬれど、かの集すでに世にひろまりて、駟馬もおひがたきあやまちとはなれり。」とある。

○利口 口先がうまくて實のない意。『和漢脹詠集』卷下・443・「鶴」・賈崇「鳳爲王賦(鳳を王と爲す賦)」に「嫌小人而踏高位、鶴有乘軒。惡利口之覆邦家、雀能穿屋。(小人にして高位を踏むことを嫌ふ、鶴軒に乗ること有り。利口の邦家を覆すことを阿久惡む 雀能く屋を穿つ)」。柳枝軒版『禪林集句』に「貪心害己利口傷身。(貪心 己を害し、利口 身を傷つく)」とある。

○鎧錚 中國春秋時代の刀工干將がきたえた二口の名劍の一つ。妻の莫邪の髪を爐に入れて作り上げたといわれ、陽を「干將」、陰を「莫邪」と名づけた。原據は『孝子傳』下二十一、類話は『注好選』、『寶物集』、『今昔物語集』、『太平記』、『三國傳記』、『曾我物語』、『和漢脹詠集注』、『搜神記』、『祖庭事苑』、『法苑珠林』、『太平御覽』などにある。『清拙和尚禪居集』「呈開先一山和尚」に「左手提莫邪、右手提干將、與師周旋步八荒。(左手莫邪を提げ、右手干將を提げ、師と周旋し八荒を歩く)」とある。

○君子 有徳の人。「君子何惡處嫌疑。須惡嫌疑涉不欺。(君子何ぞ嫌

疑に處ることを惡まむ。須からく嫌疑の欺かざるに渉ることを惡むべし」（『菅家文草』卷二・98「有所思」）。ここでは爲政者の意で、基懲歌に應ずるか。

○欺誑 あざむきたぶらかすこと。「君子」の「不欺誑」は見いだせなかつたが、「宰我問曰、仁者雖告之曰井有仁者焉、其從之也。子曰、何爲其然也、君子可逝也、不可陷也、可欺也。不可罔也。（宰我問うて曰く、仁者は之を告げて、井に仁有りと曰ふと雖も、其れ之に従はんや。子の曰く、何爲すれぞ其れらん。君子は逝かしむべきも、陥るべからざるなり。欺くべきも、罔ふべからざるなり。）」（論語・雍也）は、「君子」が少しだますことはできても、人の目をくらませることなどできないとする例。『大般涅槃經』に「汝常不聞阿羅漢者。不飲酒、不害人、不欺誑、不盜、不婬。（汝 常に阿羅漢なる者を聞かずや。酒を飲まず、人を害せず、欺誑せず、盜まず、婬せず）」とある。

○周詩三百思無邪 周詩は『詩經』（三百十一篇）のこと。『論語』爲政に「子曰、詩三百、一言以蔽之、曰、思無邪。（子曰く、詩三百、一言以て之を蔽はば、曰く、思ひ邪無し）」。『翰林五鳳集』跋に「凡詩者。權輿於擊壤康衢之謡。演逸於卿雲南風之謡也。自爾以降。周詩三百餘篇。魯司寇刪定之。（凡そ詩は、擊壤衢之謡によつて權輿とせらる。卿雲南風の謡によつて演べ逸せらるなり。爾より以降、周詩三百餘篇、魯の司寇 之を刪定す）」とある。

▼通釋  
不妄語戒

一言口に出してしまつてはもうとりかえしがつかない。

口先だけの利口は人を傷つけ、名劍鎧錆をも鋭利でないと言い張る。爲政者はもとより欺き誑かしたりはしないものだ。

詩經三百篇の精神は、思い邪無しの一匁に盡きる。

（川崎）

### 210 不飲酒戒

斟無及亂世間教  
出世門中豈濕脣  
菩薩聲聞諸律行  
只斯一失失全眞

○○●●●○●  
●●○○●●○  
○●○○○●○  
●○●●●●○○

▼詩型 七言絶句 ▼韻字 脣・眞（平水韻上平聲十一眞韻）

▼訓讀

### 不飲酒戒

斟みて亂に及ぶこと無きは世間の教へ 出世門中 豈に脣を濕らさんや  
菩薩 聲聞 諸律行  
只だ斯の一失 全眞を失ふ

▼校異 「菩薩聲聞諸律行、只斯一失失全眞」は、『基懲公記』に「菩薩比丘諸細行、從斯一失失全眞」を作る（205番詩▼参考(1)）。

○不飲酒戒 『佛教語大辭典』「不飲酒戒」項に「ふおんじゅかい 酒を飲むことを禁ずる戒め。在家・出家のべつなく、これを規定する。在家人にとっては五戒の一つ。酒は佛道修行の邪魔になるばかりでなく、人の心を狂わすものだからである。禪寺ではしばしば「葷酒山門に入るを許さず」と石に刻んで標示する。實際には「醉っぱらっては

いけない」という教えとして説かれている」とある。『華嚴經内章門等雜孔目』卷二に「五戒者、一不殺戒、二不盜戒、三不邪婬戒、四不妄語戒、五不飲酒戒」。(205番詩▼参考)

○無及亂 『論語』郷黨に「唯酒無量、不及亂（唯だ酒は量無かるとも、亂に及ばず）」。

○世間教 世の中の教え。「世間」は佛教語、世の中、世俗の意。『月燈三昧經』卷四に「若說億種修多羅、遠離一切世間教（若し億種の修多羅〈佛典〉を説かば、遠く一切の世間の教へに離れん）」。

○出世 佛法の世界。『起信論註』に「世門則是生滅。出世門者則是眞如（世門は則ち是れ生滅。出世門者は則ち是れ眞如）」。

○濕脣 飲み物で口を濕らす。少し飲む。一休宗純『狂雲集』の「飲酒戒」に「痛飲三杯未濕脣、醉吟只慰樂天身。稜道者任念起處、宣明酒伴也誰人（痛飲三杯未だ脣を濕はさず、醉吟 只だ樂天の身を慰むるのみ。稜道者は念の起くる處に任せ、宣明にす 酒伴は也<sup>ま</sup>た誰人なるか）」。

○菩薩聲聞 「菩薩」は大乗の修行者（「自ら佛道を求める、他人を救済し、さとらせる者」）、「聲聞」は小乗の修行者（「自己の完成にのみ努力する出家僧」）。『佛教語大辭典』「菩薩戒」項および「聲聞戒」項参照。『宗鏡錄』卷第九十六「慧日永明寺主智覺禪師延壽集」に「如是展轉施諸菩薩聲聞（是くの如く展轉して、諸を菩薩聲聞に施す）」。

○律行 「戒律にかなつた行」（『佛教語大辭典』）。唐・釋道世『法苑珠林』卷五十五「宋仇那跋摩者、……宋初、來遊中國、宣譯至典甚眾。律行精高、莫與爲比。（宋の仇那跋摩なる者、……宋初、中國に來遊し、

至典を宣譯すること甚だ眾し。律行 精高にして、與に比を爲すこと莫し」。唐・法照「送清江上人」詩に「一國詩名遠、多生律行高。（一國 詩名遠く、多生律行高し）」。

○只斯 南宋・劉克莊『後村詩話』卷八に「平庵五言絕句、……諸葛祠堂云、羽扇白綸巾、堂堂六尺身。我觀秦漢下、宇宙只斯人。（平庵の五言絶句、……諸葛祠堂に云ふ、羽扇白綸巾、堂堂 六尺の身。我觀る秦漢の下、宇宙只だ斯人のみ）」。月舟壽桂「池塘蛙聲」詩に「春去綠陰鶯亦老、詩腸鼓吹只斯聲。（春去り綠陰り鶯も亦老い、詩腸鼓吹するは只だ斯の聲のみ）」（『翰林五鳳集』卷三）。

○失 一つの過ち。杜甫「敬寄族弟唐十八使君」（敬しみて族弟の唐十八使君に寄す）詩に「一失不足傷、念子孰自珍。（一失傷むに足らず、念ふ子孰<sup>ちらづ</sup>自珍せよ）」。

○全眞 唯一絶對的で完全な眞理のことか。『佛果圓悟禪師碧巖錄』卷一に「頭頭是道。物物全眞。（頭頭是れ道。物物全眞）」。南宋・韓淲「潤泉集」卷十八「淨名石刻」詩に「淨名居士本天人、冷坐毗耶百病身。華髮蒼顏只如此、便多言說也全眞。（淨名居士本天人、冷坐（黙黙と坐禪すること）毗耶（精進の意の毗梨耶の略か）百病の身。華髮蒼顏 只だ此くの如く、便ち言說多きも<sup>ま</sup>也た全眞）」。琴叔景趣「春圃移花」詩に「小圃移花詩興新、人生知足是全眞。（小圃花を移して詩興新に、人生足るを知るは是れ全眞）」（『翰林五鳳集』卷四）。

#### ▼通釋

不飲酒戒

酒を酌み飲んでも亂れるまでに至らぬようにとは世俗の教えである。

まして佛門の者がどうして酒で唇を濕らすことなどあるう。

大乗、小乘それぞれの修行者には多くの戒律に沿った行がある。

ただこの飲酒一つの過ちでも唯一絶対の眞理をなくしてしまう。

(芳村)

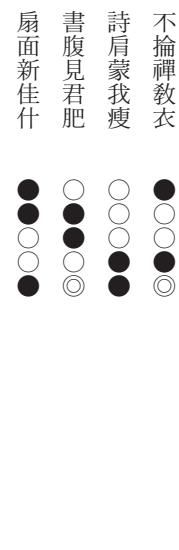
扇面の新佳什

清風 玉韻揮ふ

▼注

○南京多聞上人 南都興福寺の多聞院英筭。近衛家を介して桂嶽宗芳が親炙していた。

○話茶 茶話と同意か。それならば茶を飲みながらの談話の意。『林和靖集』「盱眙山寺（くいさんじ）」詩に見える「高僧拂經榻、茶話到黄昏。（高僧經榻を拂い、茶話黄昏に到る）」の一聯は、本作の典據と考えられるものの、この「茶話」は禪宗教團で、師僧が隨時に行う說法教訓の意味である。ここではそうした用途ではなく、もつとくだけた文學談義の意味であろう。



▼詩型 五言律詩

▼韻字 飛・暉・衣・肥・揮（平水韻上平聲五微韻）

▼訓讀

夏日南京の多聞上人を迎えた茶話をする

上人扇上の詩に次す

冰壺 涼氣飛ぶ

共に墳簾の樂を奏して 禪教の衣を掻ばず

詩肩 我が瘦せたるを蒙け 書腹 君が肥えたるを見る

○冰壺 冰を入れた玉製の壺。轉じて心が清淨潔白であることとの比喩に用いる。王昌齡「芙蓉樓送辛漸（芙蓉樓にて辛漸を送る）」詩の「洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺。（洛陽の親友 もし相ひ問はば、一片冰心 玉壺に在りと）」が典據か。

○對斜暉 「斜暉」は斜めに射す夕陽の光。ここでは、歡談にかまけていつの間にか夕刻になってしまっていた、の意。

○墳簾樂 「詩經」「小雅」の「何人斯」篇に「伯氏吹墳、仲氏吹簾。（伯氏墳を吹き、仲氏簾を吹く）」とあり、完璧なアンサンブルを意味したことから、「墳簾」は仲睦まじい兄弟の喩えとして用いられた。「簾」は正しくは「簾」。英筭は箏や笛を得意としており（『无上法院殿御日記』元祿八年八月十九日條）、それを踏まえた措辭か。

○不倫禪教衣 禪衣と教衣。「禪衣」は禪僧の法衣で「教衣」は顯密僧の法衣。「掻」はえらぶの意。宗派の違いを超えて、の意。

○詩肩 貧寒と苦吟で詩人が瘦せさらばえて肩胛骨が聳えるように入ること。蘇軾の「是日宿水陸寺、寄北山清順僧二首（是の日 水陸

寺に宿し、北山清順僧に寄す二首）」其二の「遙想後身窮賈島、夜寒

應聳作詩肩。（遙かに想ふ 後身窮賈島ならんと、夜寒應に聳えて詩

肩を作すべし）」に據る表現。

○蒙我瘦 本邦禪林では唐・孟啓撰『本事詩』「高逸 第三」所載、

李白作に擬せられた「飯顆山頭逢杜甫（飯顆山の頭にて杜甫に逢ふ）」

詩が廣く受容された。そのなかの一聯「借問別來太瘦生、總爲從前作

詩苦。（借みに問ふ 別れて來り太だ瘦生、總べて從前の詩を作るこ

との苦なるが爲なり）」は杜甫の苦吟を象徴するものとして殊に愛唱

された。この故事に取材した蘇軾「次韻沈長官（沈長官に次韻す）」

詩の「不獨飯山嘲我瘦、也應糠覈怪君肥。（獨り飯山にて我が瘦せた

るを嘲けるのみならず、也た應に糠覈にて君が肥えたるを怪しむべ

し）」が、この措辭の典據と考えられる。ここでは、「優しい上人は私

を嘲ることなく、受け止めてくれるのだ」と轉じた。一句の意味は「あなた

の豊かな詩作の才は杜甫や蘇軾には遠く及ばない痩せ衰えた私の

苦吟を受け止めてくれる」となるか。

○書腹見君肥 「蒙我瘦」項に掲げた蘇軾詩における「瘦・肥」の對

比を踏まえつゝ、覺範慧洪『石門文字禪』卷三「治陽何退翁謫長沙、會宿龍興思歸戲之。（治陽の何退翁長沙に謫せられ、會たま龍興にて

宿するに思歸あり之れに戯る）頌に見える「平生貯書腹、中有文武膽（平生書を腹に貯え、中に文武の膽有り）」の一聯に據つたか。安

岡正篤「六中觀」の「腹中有書」を想起させる。一句は「豊かな

讀書によつて蓄積された知徳は、あなた自身を豊かにしている」の意味か。

○扇面新佳什 扇面に描かれたあなたの新しい秀作。

○清風 杜牧「早秋」詩の「大熱去酷吏、清風來故人。（大熱 酷吏

去り、清風 故人來たる）」に據る表現。扇による涼しい清風と、涼

しい風を運んでくるような親しい友人の姿を重ねた。

○玉韻 相手を敬い、その作った詩をいう。素晴らしい詩文。

#### ▼通釋

ある夏の日、南都の多聞院の英筭上人を迎えてしばし雑談した

その際、たまたま目にした上人自筆の扇面の詩に次韻した作

冷ややかな冰壺を前にすると爽やかな涼氣がかけめぐるよう（清潔

で純眞なあなたと對してると涼氣が漂うように心地よく）、

親しい友である客人と歓談しているとあつという間に夕方になつてしまふ。

上人とは氣心の知れた兄弟のよう親しく、

宗派のへだたりをも超えてしまう。

その文學的才能は、偉大な先人に遠く及ばない私の未熟をも補つてくれるほどで、

浩瀚な讀書によつて得られた知徳が、あなたの人の柄を豊かに見せる。

それは、扇から送られる清らかな風のように爽やかで親しい友人であるあなたにふさわしい優れた作品であつたよ。

（中本）

216 本月十有二日奉稟

陽明左相府使命次得被附傳

一乘正覺法親王尊問<sup>宗芳</sup>焚香頓首

展開封函而奉領

高偈一絕之嘉惠不堪恐懼慚愧之至

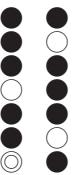
菲德薄福省福幸蒙

尊貴大人恩渥不知所以陳謝不肖

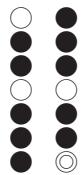
鄙拙謹次嚴韻奉呈

法親王金蓮下

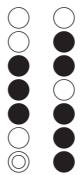
遠傳貴問耀泉石



句寫繡懷玉腕書



禪苑幸逢自恣日



瑤篇捧讀幾回舒



▼詩型 七言絕句（承句孤平）

▼韻字 書・舒（平水韻上平聲六魚韻）

▼訓讀

本月十有二日、

陽明左相府の使命を稟け奉り、次いで、

一乘正覺法親王の尊問を附傳せらることを得。宗芳焚香頓首封

函を展開して、

高偈一絶の嘉恵を領し奉る。恐懼慚愧の至りに堪へず。菲德薄福、

福幸を省みて、

尊貴大人の恩渥を蒙る。謝を陳ぶる所以を知らず。不肖鄙拙謹ん

で嚴韻を次ぎ、

法親王金蓮下に呈し奉る、

遠く貴問を傳ふ 泉石耀く 句ごとに繡懷を寫す 玉腕の書

禪苑幸ひに逢ふ 自恣の日 瑶篇捧げ読みて幾回か舒ぶ

▼注

○本月十有二日 215 番詩の「夏日」「六月」、216 番詩「七月既望見東山大字燈」（七月十六日）から、216 番詩は元祿十三年（一七〇〇）七月十二日の作か。

○陽明左相府 基潤のこと。

○一乘正覺法親王 一乘院宮眞敬親王。正覺は「正等覺、等正覺、正盡覺ともい。三藐三菩提の略。正しい佛のさとりのこと」（『總合佛教大辭典』）。『古畫備考』帝家「眞敬法親王」項「大德寺什寶大燈國師像一乘院眞敬親王筆一幅」とあるように、一乘院宮眞敬親王は大德寺開山大燈國師（宗峰妙超、一二八二—一三三七）眞影を描いたが、その基潤贊草案に「元祿十二初冬廿二日、一乘正覺親王改寫大燈帝師古眞影、被贈大德寺、此日也」（『基潤公記』元祿十三年八月十五日條）とある。

○嘉惠 天子のめぐみ。

○菲德・薄福 菲德は徳のうすいこと。薄福は幸福にめぐまれないことを。ともに桂嶽宗芳の謙稱。

○恩渥 厚い恩。深い恩恵。特に、天子のめぐみについていう。策彦周良「謝范南岡齋酒肴來訪（范南岡の酒肴を齋し來訪するを謝す）」に「感君攜酒慰煩襟 交義未深恩渥深。（君に感ず 酒を攜へ煩襟を

慰むことを。交義未だ深からざるといえども恩渥は深し)」(『翰林五鳳集』卷四十二)とある。

○金蓮 黃金色の蓮華。佛教語。金剛界と胎藏界の兩部をいう。また、金剛部と蓮華部の二部の意にも用いる。九鼎<sup>三</sup>重「宮燭」に「日暮宮中命燭奴。金蓮燭燭照氍毹。侍臣誰拜恩光厚。前有孤絰後老蘇。(日暮宮中 燭奴を命じ、金蓮燭燭氍毹を照らす。侍臣誰か恩光の厚なることを拜せんや。前に孤絰有り 後には老蘇)」(『翰林五鳳集』卷四十四)。

○泉石 泉水と庭石。熙春龍喜「率命穎子奉謝通仙仙伯之光賛云……(率に穎子に命じ通仙仙伯の光賛を謝し奉ると云ふ……)」に「故人來問小柴扉。相遇唯愁日色微。一爲高車到斯地。山中泉石亦生輝。(故人來りて問ふ小柴扉、相遇ひ唯だ日色の微なるを愁ふ。一に高車の斯地に到るが爲に、山中の泉石 亦た輝きを生ず)」(『翰林五鳳集』卷二十四)。

○繡懷 「珍瓊割繡段、里俗祖風義。(珍瓊に繡段を割き、里俗 風義を祖とす)」(李賀「昌谷詩」)などの美しい詩文を意味する「繡段」から、「繡」は「懷」を修飾し、「懷」は一乘院宮眞敬親王の「高偈一絕」にこめられたおもいを意味するか。

○玉腕書 「玉」は美稱。北宋・蘇軾「四時詞四首」其二に「玉腕半掩雲碧袖。樓前知有斷腸人。(玉腕半ば掩る雲碧の袖、樓前に知る断腸の人有らんことを)」(『四河入海』)とある。ここでは、一乘院宮眞敬親王が自ら筆をとつたことをいう。

○禪苑 禪門、禪寺の意。「這老楊岐僅得人、看來禪苑是祥麟。(這の

老楊岐 僅かに人を得たり、看來たれば禪苑は是れ祥麟)」(『雪叟詩集』三〇一—二)。

○幸逢 「幸逢堯舜無爲化 得作羲皇向上人。(幸ひに堯舜無爲の化に逢ひて、羲皇向上の人作ることを得たり)白」(『和漢歌詠集』下・帝王・656)。公宴始にみられる歌題「幸逢太平代」は、「ありふへき身をはたのまでこしまゝにおさまる御代のためしをそみる」(『碧玉集』六・1308)のように、世がおだやかに治まっていることを強調し、そこに居合わせた喜びを表現する。

○自恣日 「自恣」は、自分の欲するままに行動すること。唐・韓愈「短燈檠歌」に「一朝富貴還自恣、長檠高張照珠翠。(一朝富貴にして還自ら恣にすれば、長檠高く張つて珠翠を照らす)」(『韓昌黎集』卷五、『古文眞寶(前集)』卷八)。「自恣日」は、夏安居の最終日(七月十五日)をあらわすか。「記得世尊因自恣日、文殊過夏來至靈山。迦葉問云、仁者今夏何處安居。(記得す、世尊自恣の日に因りて、文殊、夏を過ごし來たつて靈山に至る。迦葉問ひて云く、仁者、今夏、何れの處にか安居す)」(『雪叟詩集』四二三—二八)。

○瑤篇 瑶は玉のよう美しささま。篇は詩を數えることば。一乘院宮眞敬親王の「高偈一絕」を指す。

▼通釋

○捧讀 文書などを目の前に高く捧げ持つて読むこと。

本月十二日、陽明左相府の命を受け奉り、次いで、一乘正覺法親王のお手紙を賜った。香をくゆらせ、丁重に封函を開き、高偈一絶のおめぐみをうけたまわった。恐れ多いことかぎりない。菲徳

薄福の身で幸福に預かり、尊い方の厚恩を蒙るなど、なんと御禮を申し上げてよいのかもわからない。ただ謹んで、嚴韻を次ぎ、法親王のおわしますもとに捧げ奉った詩、  
遠く貴方のお手紙が傳わると、泉石も光が加わったようになりました。  
賜りました句は、麗しいお考えを自らがお書きになつたことです。  
禪苑は幸運にも自恣の日でした。  
美しい御詩を捧げ読み、幾度となく開き見たことです。

(川崎)

218 中秋  
陽明殿上賞月應  
鈞請賦卽興

槐庭三五夜  
月出暮雲披  
樂擬廣寒殿  
闕隣太液池  
樹標懸寶鏡  
湖底浸玻璃  
明世と天象と  
通光天涯を（に）偏し

槐庭三五の夜  
月出でて暮雲披く  
樂は擬す廣寒殿  
闕は隣る太液池  
樹標（に）寶鏡を懸け（寶鏡懸かり）  
湖底（に）玻璃を浸す（玻璃浸る）  
明世と天象と 通光天涯を（に）偏し

## ▼注

○中秋 元祿十三年（一七〇〇）八月十五日。『基熙公記』同日條に、桂嶽宗芳が來邸し、居合わせた多聞院英筭と言談したとある。この記事の「桂嶽有詩（桂嶽詩有り）」が218番詩である。（▼参考）

○陽明殿 近衛家の今出川御殿。邸内には摘星閣（のちに列星閣と改稱）があり、あるいはここでの観月であつたか。

○鈞請 「鈞」は敬辭。上位、尊者に對する書翰や話し言葉に多く用いる。「鈞請」は御要請、御所望の意。183番詩に「鈞韻」の語あり。

○槐庭 三公を指す。周代の朝廷に三本の槐を植え、その下に三公が分座したので、槐が三公の位の意となつた。『文選』卷五十八の南齊・王儉「褚淵碑文」に「出參太宰軍事、入爲太子洗馬、俄遷祕書丞。贊道槐庭、司文天閣。（出でては太宰軍事に參じ、入りては太子洗馬と爲り、俄かに祕書丞に遷る。道を槐庭に贊け、文を天閣に司る）」とあり、李善注に「周禮曰、面三槐、三公位焉。（周禮に曰はく、三槐に面し、三公焉に位す）」、張銑注に「贊、佐也。槐庭、三公位也。謂爲太宰參軍是爲佐道也。司、主也。言主文史之任於天祿之閣也。天

- ▼詩型 五言律詩（第四句孤平）
- ▼韻字 披・池・璃・涯（平水韻上平聲四支韻）
- ▼訓讀

中秋 陽明殿上月を賞し鈞請に應じて卽興を賦す

祿書閣、名謂祕書丞也。（贊は、佐くるなり。槐庭は、三公の位なり。太宰の參軍と爲るは是れ道を佐くると爲すを謂ふなり。司は、主るなり。言は文史の任を天祿の閣に主るなり。天祿書閣は、名づけて祕書丞を謂ふなり）とある。三公は、中國では後漢以後、太尉・司徒・司空とし、日本では太政大臣・左大臣・右大臣とした。元祿十三年の基潤は關白であった。

○三五夜 十五夜 唐・白居易「效陶潛體（陶潛體に效き）」詩十六首其七に「中秋三五夜、明月在前軒。（中秋 三五夜、明月 前軒に在り）」『白氏文集』卷五。また「八月十五日禁中獨直對月憶元九（八月

十五日夜、禁中に獨り直し、月に對して元九を憶ふ）」詩に「三五夜中新月色、二千里外故人心。（三五夜中 新月の色、二千里外 故人の心）」（『白氏文集』卷十四）とある。『虛堂錄犁耕』に「正當三五夜、何處不嬪娟。（正に三五夜に當たりては、何れの處か嬪娟ならざる）」。

○月出 月が現れる。『詩經』陳風「月出」に「月出皎兮、佼人僚兮。（月出でて皎たり、佼人 僚たり）」。『點鐵集』引く「聯一雲透法身頌」に「雲收月出空如水、利利塵塵總一般。（雲收まり月出でて空は水の如く、利利 塵塵 總て一般）」。

○暮雲披 日暮れの雲が切れる。南宋・管鑑「水調歌頭（舉俗愛重九）」詞「北望江南路、回首暮雲披。（北のかた江南路を望み、回首すれば暮雲披く）」。

○樂擬廣寒殿 音樂は月世界の仙宮、廣寒殿での演奏に喻えられる、という意。「廣寒殿」は唐・柳宗元の撰という『龍城錄』卷上「明皇夢遊廣寒宮」に見える故事。玄宗が開元六年に申天師道士の術をもつ

て、天士と鴻都の客とともに月中に遊んだところ、寒氣迫る中、巨大な宮殿を見た。扁額には「廣寒清虛之府」とあった。門衛のもつ白刃は凝雪さながらで、素娥十餘人が大きな桂樹の下で笑舞するのが見え、また甚だ清麗な音樂が聞こえた。下界にもどった玄宗は、その舞を思い浮かべ、「霓裳羽衣」の舞曲を作ったとい。月舟壽桂「花下歩月」詩に「醉步褰衣桃李蹊、枝枝和月影高低。吟身疑入廣寒殿、萬木吹香似木犀。（醉歩して衣を褰ぐ 桃李の蹊、枝枝 月に和して影高低す。吟身 廣寒殿に入るかと疑ひ、萬木 香を吹き木犀に似たり）」（『翰林五鳳集』卷五）。

○闕 門闕。宮門や城門の兩側に建てられた樓臺。唐・許敬宗「奉和過慈恩寺應制（慈恩寺に過ぎるに和し奉る、應製）」詩に「鳳闕隣金地、龍旛拂寶臺。（鳳闕 金地に隣し、龍旛 寶臺を拂ふ）」（『全唐詩』卷三十五、靜嘉堂明鈔本『文苑英華』卷百七十八）とある。宮門の意に用いられることが多いが、基潤邸の門をいうと解釋した。

○太液池 「太液池」の表記が正しい。漢の武帝が作った池。また唐の大明宮にも太液池があった。唐・白居易「長恨歌」に「歸來池苑皆依舊、太液芙蓉未央柳。（歸り来れば池苑 皆舊に依る、太液の芙蓉未央柳）」とある。宋・盧多遜「後池對新月應制韻限些子兒」詩に「太液池邊看月時、好風吹動萬年枝。誰家玉匣開新鏡、露出清光些子兒。（太液池邊 月を見る時、好風吹き動かす 萬年枝。誰が家の玉匣か新鏡を開く、露は清光を出だすこと些子兒）」（『後山詩話』、『聯珠詩格』）とある。禁裏の泉水をいう。あるいは基潤邸内の池を指すか。ここでは後者の意に解釋した。

○樹標 梢。明・楊守阤「拜湖後張四舅墓（湖後の張四舅の墓に拜す）」詩に「行經霧靄迷榛莽、拜起嵐光動樹標。（行きて霧靄の榛莽を迷はずを經、拜して嵐光の樹標に動くに起つ）」とある。

○懸寶鏡 鏡のように丸い月が天空に掛かる。清・乾隆帝「江月」詩に「初勝金蛇漾曲渚、乍懸寶鏡涵輕淪。（初め金蛇を騰げて曲渚に漾ひ、乍ち寶鏡を懸けて輕淪に涵る）」とある。李白「李廿五寄遠十二首」其二に「寶鏡掛秋水、羅衣輕春風。（寶鏡 秋水に掛かり、羅衣 春風に輕ろし）」（『點鐵集』引）。

○湖底 湖の底。北宋・吳則禮「無著以東坡西湖觀月聽琴詩示予因次韻（無著東坡の西湖にて月を觀て琴を聽く詩を以て予に示し因りて次韻す）」詩に「白月在湖底、脫冠睇微雲。（白月 湖底に在り、冠を脱して微雲を睇る）」とある。「太液池」を湖に見立てたと思われる。また『新古今和歌集』卷十八・雜下・1699・作者「菅贈太政大臣（菅原道眞）」の題「海」歌に「海ならずたたへる水の底までに清き心は月ぞてらさむ」とあるのを念頭に置いた措辭とも思われる。

○玻璃 透明な玉の一種。満月に喻える。元・黃子行「西湖月」詞に「湖光冷浸玻璃、蕩一晌薰風、小舟如葉。（湖光冷やかにして玻璃を浸り、一晌の薰風蕩きて、小舟は葉の如し）」とある。村庵（希世靈彥）「寄湖上春波年少」詩に「明月在天天在水、玻璃萬領影涵秋。（明月天に在り 天は水に在り、玻璃萬頃 影秋に涵る）」（『翰林五鳳集』卷二十五）。また、瑞溪周鳳「水閣邀月（水閣にて月を邀ふ）」詩に「百頃玻璃涵桂影、馮夷窟仙廣寒宮。（百頃 玻璃 桂影を涵し、馮夷窟仙 廣寒宮）」（『翰林五鳳集』卷十八）。

○明世 法が行き渡り筋道の通った政治が行われている時代。唐・韋應物「灔上西齋寄諸友（灔上の西齋にて諸友に寄す）」詩に「明世重才彥、雨露降丹霄。（明世 才彥を重んじ、雨露 丹霄より降る）」とある。

○天象 日月星辰が運行する天空の様子。東晉・陶淵明「九日閑居」詩「露淒暗風息、氣澈天象明。（露淒くして暗風息々、氣澈くして天象明かなり）」とある。

○通光 明るい光がどこまでも届く。明末清初・顧景星「洞庭龍女歌」に「銀漢通光月灑灑、桂華倒映鼈鱗屋。（銀漢 光を通じ月灑灑として、桂華 倒に映す 鼈鱗の屋）」とある。月の輝き、また行き届いた治世を指す。

○海涯 海邊。唐・曹松「中秋對月」詩に「無雲世界秋三五、共看蟾盤上海涯。（無雲 世界 秋三五、共に看る 蟾盤の天涯より上のを）」。ここでは海のはて、僻遠の地をいう。宋・蘇軾「次韻錢穆父紫薇花（錢穆父の紫薇花に次韻す）二首」其二に「箇中尚有絲綸句、坐覺天光照天涯。（箇中尚ほ有り 絲綸の句、坐ろに覺ゆ 天光の天涯を照らすを）」とある。

#### ▼通釋

中秋に近衛殿にて月を賞で、御所望に應じて即興の詩を作る  
關白公のお屋敷で十五夜を迎え、  
日暮れの雲がきれて月が出た。  
奏樂は月宮の廣寒殿の仙樂さながら、  
御門は太液池と隣りあわせ。

梢には鏡のような月が懸かり、

湖底にまで玻璃のごとき月の光が廣がる。

曇り無き治世とこの天象の月は、

耀く光を放ち海の果てまで覆つてゐる。

▼参考 『基熙公記』元祿十三年八月十五日條

桂嶽未刻來、英筭相共言談。月登東嶺、逸興無比類。薄暮、高秀宿禰

「辻高秀」、近家「辻近寛」兩人來、有小管絃。余彈箏、吹笛、有其興。桂嶽有詩。余病後忘卻萬事、未及老述等、空見月而已、夜半分散了。

(芳村)

223 陽明殿<sub>下</sub>秋日遊紫竹山莊而

有詠藻<sub>野言</sub>奉次 尊韻

竹村有路蘚痕堆



門設不容俗客推



野趣宜秋駐駕



逢僧半日話西來



▼詩型 七言絕句 ▼韻字 堆・推・來 (平水韻上平聲十灰韻)

▼訓讀

陽明殿下、秋日、紫竹山莊に遊びて、詠藻有り。野言、尊韻に

次ぎ奉る、

竹村 路有れど 蘚痕堆し。

門設けて容れず 俗客の推すことを。

野趣秋に宜しくして 台駕を駐む。

僧に逢ひて半日西來を<sub>かた</sub>話る。

○陽明殿下 基熙のこと。

○秋日 元祿十三年(一七〇〇)八月二十八日。『基熙公記』同日條に、多聞院英筭を同道し紫竹山莊へ出かけ、桂嶽を呼び出したといふ。(▼参考)

○紫竹山莊 紫竹は「室町期から見える地名。山城國愛宕郡大宮郷のうち。大徳寺の北、大徳寺通り沿いに位置した」(『角川日本地名大辭典26京都府』上)。同所には近衛家別業の纂青軒(紫竹山莊)があった。『元上法院殿御日記』貞享二年(一六八五)十月二十日條には「しちくへ行、大とく寺の紅葉、いちやうつくしくそめ、今ほとさかりゆへたちより、それよりしちくへ行」とみえ、大徳寺を經て紫竹山莊へ向かっている。

○詠藻 詠草とも。和歌などの草稿のこと。基熙が紫竹山莊で詠んだ和歌は「基熙公御詠草」(資料番號「60838」、端裏書「元祿十三八廿八」)の「英筭を纂青軒にあひくしてよめる／むすこけのみとりのみみし山里に心ちりなき人もとひ來ぬ」(韻字「來・上平聲灰韻)。

○竹村 竹が羣がつてはえているところ。唐・杜甫「弊廬遣興奉寄嚴公(弊廬興を遣り嚴公に寄せ奉る)」に「野水平橋路、春沙映竹村。(野水橋路に平らかに、春沙 竹村に映ゆ)」(『全唐詩』卷二百二十八)。「紫竹」を意識した表現か。

○蘚痕 蘚は石碑などに生える苔のこと。張鼎「僧舍小池」に「引出自雲根、潺潺漲蘚痕。(白雲根を引き出で、潺潺たり 蘚痕に漲る)」(『111

『體詩』。苔の通路（人通りのない苔むした路）と同意か。『雅親詠草』

157に、題「苔」で「すまで年ふる里となる我やとや都の内の苔の通路」とある。

○堆 うずたかく積もっている様子。『新撰萬葉集』卷下・555に「草露潤袖増秋往 山邊保花怨落堆。（草露 袖を潤し秋の往くを増し、山邊 花を保ち落ちて堆きを怨む）」とある。

○俗客 俗世間の客。風流を解さない人。唐・韓愈「竹洞」に「竹洞何年有、公初斫竹開。洞門無鎖鑰、俗客不曾來。（竹洞何年か有る、公初めて竹を斫りて開く。洞門鎖鑰無く、俗客曾て來らず）」（『韓昌黎詩集』卷九、『全唐詩』卷三百四十三）。また、西胤俊承「苔竹軒」に「苔滿幽庭竹滿軒。自然俗客不過門。可憐一種無情物。化育猶霑雨露恩。（苔は幽庭に満ち竹は軒に満つ。自然 俗客 門を過ぎず。憐れむべし 一種の無情の物、化育 猶ほ雨露の恩に霑ふ）」（『翰林五鳳集』卷四十一）。

○推 唐・賈島の「題李凝幽居（李凝の幽居に題す）」の「鳥宿池邊樹、僧推月下門。（鳥は宿る 池邊の樹、僧は推す 月下的門）」（『長江集』卷四）。

○野趣 野山や田舎に漂う自然の趣。方干「送友及第歸浙東（友の及第して浙東に歸るを送る）」に「野趣自多愜、名香人共聞。（野趣自ら愜ふこと多く、名香 人共に聞く）」（『三體詩』）。

○駐 乗ってきた馬や車をとめてたちどまる。唐・柳宗元「酬曹侍御過象縣見寄。（曹侍御の象縣に過ぎりて見寄せられしに酬ゆ）」に「破額山前碧玉流、騷人遙駐木蘭舟。（破額山前 碧玉流、騷人 遙か

に駐む 木蘭の舟）」（『三體詩』）。

○逢僧半日話西來 唐・李涉「題鶴林寺」の「因過竹院逢僧話、又得浮生半日閑。（竹院を過ぐるに因りて僧に逢ひて話る、又浮生半日の閑を得たり）」（『三體詩』）に基づく表現。僧（桂巖宗芳）を紫竹山莊に召した基熙が半日法談したことをいう。

○西來 西方の國から渡來すること。法談の内容が、達磨大師の印度から中國へ渡來した意味を問う公案「祖師西來意」（『無門關』第三十七則）だったことをあらわす。これを題とする詠歌に、後水尾院の「僧問趙州如何是祖師西來意。州云ふ、庭前の白樹子（僧 趙州に問ふ、如何なるか是れ祖師西來の意と。州云ふ、庭前の白樹子）／そめなさばうしや西より來る秋の色は色なき庭の梢を」（『後水尾院御集』982）がある。

#### ▼通釋

陽明殿下は、秋の日、紫竹山莊に遊んで和歌を詠まれた。尊韻に次いで、私が奉った詩

竹やぶに路があるけれども、苔がうずたかく積もっている。

紫竹山莊には門が設けられているけれども、風流を解さない人の訪れを許さない。

山の素朴な風景が秋だけなわとなり、駕籠が駐まり、簾青軒に殿下がお出ましになつた。僧を相手に半日法談なさつた。

▼参考 『基熙公記』元祐十三年八月二十八日條  
兩三日氣分未快、昨夜不眠病以外也、召了丹令針治、快然、仍俄行纂

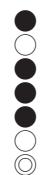
青、令相具英筭、依爲近邊、招桂嶽和尚、早速來、相共言談、有詩哥、  
薄暮歸家了、

(川崎)

224 依 台請賦悲秋

藩安仁對鏡歎白髮作秋興賦

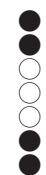
雨聲作夜灑芭蕉



井梧朝來葉葉凋



憶得安仁驚白髮



貴人頭上不曾饒



▼詩型 七言絕句 第二句第二字拗

▼韻字 蕉・凋・饒 (平水韻下平聲二蕭韻)

▼訓讀

台請に依りて悲秋を賦す、

潘安仁 鏡に對して白髮を歎じ、秋興の賦を作る

雨聲 昨夜 芭蕉に灑ぐ

井梧 朝來 葉葉凋む

憶え得たり安仁白髮に驚くことを

貴人頭上にも曾て饒さず

▼注

○依台請 「基潤公御詠草」(資料番號 61463)、端裏書「元祿十三八年六詩ノ題」に、題「悲秋」で「なかめわひぬいつしか秋の半行よな／＼月も影ほそくして」とあり、中秋の満月のあと缺け續けてごく細くなつた月を詠している。元祿十三年(一七〇〇)八月二十六日、同じ題で漢詩を賦すことを命じられたことがわかる。(▼参考)

○賦悲秋 「悲秋」は、もののあわれを感じる秋。秋の事物に觸れて

悲しみを覺えることを詠じた最初のものとして『楚辭』宋玉「九辯」の冒頭の一旬「悲哉秋之爲氣也（悲しかな秋の氣たるや）」はよく知られる。なおその末には何も成し遂げないまま人生の半ばを過ぎていくことを詠しております、また『淮南子』「繆稱訓」に「春女思、秋士悲、而知物化矣。（春に女は思ひ、秋に士は悲しみ、物の化するを知る）」とあり、「悲秋」は老いを嘆く男性の姿を想起させる。和歌においても、「悲秋聊歎老」題(『夫木和歌抄』卷十三・秋四・5551・作者「同(大江千里)」の和歌「過ぎて行く秋のかなしと見えつるは老いなむ事をおもふなりけり」)に窺われるよう、秋と老とは縁語のように用いられる。

○潘安仁對鏡歎白髮作秋興賦 安仁は、西晉の潘岳(二四七—三〇〇)の字。美男子であったという。文學では修辭に巧みで美文を稱され、『文選』に各種文體の作品が收録されている。そのうち『文選』卷十三「物色」に收録される「秋興賦」は秋の感興を詠じる。その序文は「晉十有四年、余春秋三十有二、始見二毛。(晉十有四年、余春秋三十有二、始めて二毛を見る)」のよう、晉の武帝の太始十四年、三十二歳で白髮が生え始めたと始まり、賦には「悟時歲之遁盡兮、慨俛首而自省。斑鬢髪以承辨兮、素髮颯以垂領。(時歲の遁わり盡くるを悟り、慨として首を俛かれて自ら省みる。斑鬢髪れて以て辨を承け、素髮颯として以て領に垂る)」とある。李善は「二毛」に左氏傳の杜預の注「二毛、頭白有二色也。(二毛、頭白くして二色有るなり)」を引く。以後、鏡を見て白髮を嘆く詩は枚舉にいとまがない。詩題では唐・張九齡の「照鏡見白髮」詩、白居易の「對鏡吟」詩、『翰林五

『鳳集』卷四十三に村庵（希世靈彥）の「鏡中歎白髪」がある。

○雨聲昨夜 雨音が昨夜は聞こえていた。元末明初・胡奎の「昨夜」詩に「雨聲昨夜送秋來、萬里明河匹練開。（雨聲昨夜秋を送りて來り、萬里明河匹練開く）」とある。また『翰林五鳳集』卷十七の仲芳圓伊「秋思」詩に「芭蕉零落梧桐老、夜夜風聲又雨聲。（芭蕉は零落し梧桐は老ゆ、夜夜の風聲又雨聲）」とある。

○芭蕉 芭蕉は葉が大きく、そこに降る雨の音は、白居易「夜雨」詩に「隔窗知夜雨、芭蕉先有聲。（窗を隔てて夜雨を知る、芭蕉先づ聲有り）」、杜牧「雨」に「一夜不眠孤客耳、主人窗外有芭蕉。（一夜眠らず孤客の耳、主人窗外芭蕉有り）」とあるなど、眼れない人の耳に響いて寂しさわびしさを増すものとして詠じられることが多い。

『翰林五鳳集』卷五十一の蘭坂景祐「芭蕉爲越之一溪侍者題（芭蕉越の一溪侍者の爲に題す）」に「佳人回首隔天涯、露灑芭蕉情更加。（佳人首を回らすも天涯を隔て、露は芭蕉に灑きて情更に加ふ）」とある。

○井梧 井戸の傍らの梧桐。梧桐の葉は大きく、白居易「早秋獨夜」詩に「井梧涼葉動、隣杵秋聲發。（井梧涼葉動き、隣杵秋聲發す）」とあるように、秋になつて黄ばみ風に鳴り落ちる音は秋の風物の一つとして詠じられる。『翰林五鳳集』には「金井梧桐」「井梧飄葉」「井梧秋聲」の詩題が見える。<sup>189</sup> 189番詩の注「秋雨梧桐殿閣前」項参照。

○朝來 朝、朝には。白居易「初見白髪（初めて白髪を見る）」詩に「白髮生一莖、朝來明鏡裏。（白髪一莖を生ず、朝來明鏡の裏。）」とあり、『翰林五鳳集』卷四十三の仲芳圓伊「覽鏡」詩に「朝來咲ひて鏡中に向かひて問ふ、白髮蒼顏 汝は白髮蒼顏汝是誰。（朝來咲ひて鏡中に向かひて問ふ、白髮蒼顏 汝は

是れ誰そと）」とある。

○葉葉 犹の葉も。唐・杜荀鶴の「閩中秋思」（『増注聯珠詩格』では「秋思」）詩に「雨勻紫菊叢叢色、風弄紅蕉葉葉聲。（雨は勻ふ紫菊叢叢の色、風は弄ぶ紅蕉葉葉の聲）」とある。

○凋 枯れる。唐・杜牧「寄揚州韓綽判官（揚州の韓綽判官に寄す）」詩に「青山隱隱水迢迢、秋盡江南草木凋。（青山隱隱水迢迢、秋は江南に盡き草木凋む）」とある。

○驚白髪 白髪に氣づいて驚く。老いに氣づいて心がさわぐ。宋・邵雍「萬物吟」に「既感青春老、還驚白髮新。（既に青春の老いたるを感じしに、還た白髪の新たなるに驚く）」とあり、策彦周良「和」詩に「老去偏驚白髮新、多年年少隔參辰。（老い去りて偏へに驚く白髪の新しきに。多年 年少 參辰を隔つ）」（『翰林五鳳集』卷十一）とある。

○貴人頭上不曾饒 高位の人の頭でも容赦しない。白髪はだれにでも公平に訪れることを言う。ここでは、人臣として位を極め、潘嶽のように美貌と文才を稱されたあなたでも、と理を説き、慰める意を含むのだろう。この一句は、『三體詩』所收の許渾『漁隱叢話』では杜牧の「送隱者」詩「無媒徑路草蕭蕭、自古雲林遠市朝。公道世間唯白髮、貴人頭上不曾饒。（無媒の徑路 草蕭蕭、古より雲林は市朝に遠ざかる。世間に公道たるは唯だ白髪のみ、貴人の頭上にも曾て饒さず）」の結句を用いる。英甫永雄「鏡」詩にも「閨中有物鑄銅洋。照得千莖白髮霜。豈只磨來頭妍醜。貴人頭上不曾藏。（閨中に物有り銅洋を鑄す。照らし得たり千莖白髪の霜を。豈に只だ頭の妍醜を磨し來るのみな

らんや。貴人の頭上にも曾て藏せざ」（『翰林五鳳集』卷四十三）とある。

### ▼通釋

御命令により悲秋を詠じる

潘嶽は鏡に向かって白髪を嘆き「秋興の賦」を作った

昨夜は芭蕉にそぞぐ雨音が聞こえていました。

井戸の梧桐は朝になつてみるとどの葉も枯れて、秋が來ました。

美男の潘嶽が自分の白髪に驚いたという話を覚えていらっしゃるでしょう。

どんなに高貴なたでも頭にいたるものなのです。

▼参考  
『基潤公記』元祿十三年八月二十六日條

已刻、桂嶽和尚來談、有詩哥、薄暮歸寺、

（松尾）

### 228 松并序

古之君子所愛樂、有所托、而非所僻。樂水樂山、宣王之格言。淵明愛菊、茂叔愛蓮、得騷人之題詠、入臺閣之畫圖。千載之雅操、操李唐之習俗、及于今尤甚矣。艸木雖無情、賢不肖之所愛、又如何乎。恭惟於今聖代革俗、救弊、花木於聖愛、退春色之妖怪、賞歲寒之綠翠。關白藤公體得聖愛在此物、得我山之青松、而移之禁庭。凡水陸草木、或榮于春、而瘁于夏、或秀于秋、而萎于冬。爲榮枯不變節、其唯青松乎。且命苾芻宗芳、賦蕪言一律、謹備台覽。子墨卿侍文房作問曰、不偏之謂中、聖代愛物、豈一株之松、一樹之竹乎。一艸一木不可洩恩澤焉。苔言子之論至也。未盡。君

子之中庸也、君子而時中擇賢舉之、君之明也。簡在帝心。否則賢者何倚乎。是爲序。

### 耕雪栽霜澗底苗

根株何幸入官寮

青青毓秀離塵地

鬱鬱摩霄拔俗標

避雨倚時張偃蓋

和風吟處奏虞韶

移巢棲宿千年鶴

舊是蓬萊第一條

韻字 苗・寮・標・韶・條

（平水韻下平聲二蕭韻）

### ▼訓讀

### 松并びに序

古の君子愛樂する所、托する所有りて、僻める所に非ず。水を楽しみ山を楽しむは、宣王の格言なり。淵明は菊を愛し、茂叔は蓮を愛す。騷人の題詠を得、臺閣の畫圖に入る。千載の雅操、李唐の習俗、今に及んで尤も甚だし。艸木情無しと雖も、賢不肖の愛する所、又如何をや。恭しく惟おもんみれば、今に聖代俗を革あらため、弊を救ふ。花木の聖愛に於ける、春色の妖怪を退け、歲寒の綠翠を貰す。關白藤公、聖愛の此物に在ることを體得して、我が山の青松を得て、これを禁庭に移す。凡そ水陸の草木、或いは春に榮えて、夏に瘁へひけ、或いは秋に秀で、冬に萎む。榮枯の爲に節を變ぜざるは、其れ唯だ青松か。且つ苾びつしゆ芻宗芳

に命じ、蕪言一律を賦し、謹んで台覽に備へしむ。子墨卿文房に侍す。問を作して曰く、「偏ならざるを之れ中と謂ふ。聖代の物を愛す、豈に一株の松、一樹の竹にあらんや。一艸一木、恩澤に洩るべからず。」答言す。子が論至れり。未だ盡くさず、君子の中庸や、君子にして時に中す、賢を擇んで之れを擧ぐるは、君の明なり。簡ぶこと帝心に在り。否なるときは、賢者何にか倚らん。是れ序とす。

雪に耕し霜に栽う 潤底の苗 根株 何の幸ひぞ 官寮に入る

青青秀を毓つ 離塵の地 鬱鬱摩霄 拔俗の標

雨を避け倚る時 傷蓋を張り 風に和して吟する處 虞韶を奏す  
巢を移して棲宿す 千年の鶴 舊とはれ蓬萊第一條

▼注

○君子所愛樂 愛樂は物事を愛し、好むこと。親しみ愛すること。「寬緩不苛。士以此愛樂爲用。(寬緩にして苛ならず。士此を以て愛樂して用を爲す)」(『史記』李將軍列傳)。「君子所愛樂」は「君子……、所樂而玩者爻之辭也。(君子……、樂しみて玩ぶ所の者は爻の辭なり)」(『周易』繫辭傳上)。

○托 ほかの物事やことばにかこつける。あずける。  
○僻 片寄る。

○樂水樂山 「子曰、知者樂水、仁者樂山、知者者動、仁者靜、知者樂、仁者壽、(子の曰く、知者は水を樂しみ、仁者は山は樂しむ。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂しみ、仁者は壽し)」(『論語』雍也)。  
○宣王之格言 宣王は文宣王。孔子の論(おもいな)。開元二十七年(七三九)玄宗によつておくられた。『續日本紀』卷二十九(稱德天皇) 神護景雲

二年(七六八)七月辛丑に、「大學助教正六位上膳臣大丘」が天平勝寶四年(七五二)に入唐した際の見聞として「今主上大崇儒範。追改爲王。……敕號文宣王。(今主上「玄宗」大いに儒範を崇し、追つて改め王と爲す。……敕して文宣王と號す)」とある。「獲麟一句絕筆とは文宣王の御詞歟」(『俳諧類船集』「臨終」)。ただし、孔子の論を「宣王」と略する例は見あたらない。「文」字を訛脱するか。

○淵明愛菊 「淵明」は東晉・宋の陶潛。字淵明。菊を好んだ。「九月九日無酒、坐籬邊叢中。摘菊盈把而坐。久之望見白衣人至。太守王弘送酒也。飲醉而歸。(九月九日に酒無く、籬邊の叢中に坐す。菊を摘んで把に盈ちて坐す。久しうして白衣人の至るを見す。太守王弘の酒を送れるなり。飲み醉うて歸る、と)」(『蒙求』「淵明把菊」)。黃庭堅「王才元惠梅花三種。皆妙絶。戲答詩(王才元梅花三種を惠まる。皆妙絶なり。戯れて答ふる詩)」に「舊時愛菊陶彭澤、今作梅花樹下僧(舊時菊を愛するは陶彭澤、今梅花樹下の僧と作る)」とある。

○茂叔愛蓮 「茂叔」は北宋の周敦頤。字茂叔。蓮を好んだ。「水陸草木之花、可愛者甚蕃。晉陶淵明獨愛菊、自李唐來、世人甚愛牡丹。予獨愛蓮之出淤泥而不染、濯清漣而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可亵覩焉。予謂、菊花之隱逸者也。牡丹花之富貴者也。蓮花之君子者也。噫菊之愛、陶後鮮有聞。蓮之愛同予者何人。牡丹之愛宜乎眾矣。(水陸草木の花、愛すべき者甚だ蕃し。晉の陶淵明は獨り菊を愛す。李唐よりこのかた、世人甚だ牡丹を愛す。予獨り蓮の淤泥より出でて染まらず、清漣に濯はれて妖ならず、中は通じ外は直く、蔓あらず枝あらず、香遠くして益ます清く、亭亭とし

て淨く植ち、遠觀すべくして製斷すべからざるを愛す。予謂へらく、菊は花の隱逸なる者なり。牡丹は花の富貴なる者なり。蓮は花の君子なる者なりと。噫、菊を之れ愛するは、陶の後に聞くこと有ること鮮し。蓮を之れ愛するは、予に同じき者、何人ぞ。牡丹を之れ愛するは、宜なるかな、眾きこと。」（『古文眞寶後集』卷二「愛蓮說」）。『俳諧類船集』卷一・蓮に「周茂叔は愛蓮の説を作りて。其文に蓮を君子にたとへたり」。西胤俊承「讀濂溪愛蓮記（濂溪愛蓮記を讀む）」の「世間草木盡春容。獨愛紅蓮出水濃。歲晚半池霜倒後。與僧結社倚青松。（世間の草木盡くす春容、獨り紅蓮の水に出で濃きを愛す。歲晚半池霜倒するの後、僧と結社し青松に倚る）」（『翰林五鳳集』卷十五）は愛蓮に倣い、青松に心を寄せる様を詠む。

○騷人 文人、詩人の稱。唐・李白「古風」に「正聲何微茫、哀怨騷人を騷人。揚馬激頽波、開流蕩無垠。」（正聲 何ぞ微茫たる、哀怨騷人を起こす。揚馬 頽波を激し、流れを開き蕩として垠無し）。熙春龍喜「黃鸝語太平」に「潤道雪消春色鮮、騷人停曉鶯邊。百花風靜大平日、一曲調高舜五絃。」（潤道 雪消え 春色鮮し、騷人駕を停む 曉鶯の邊。百花風靜かなり 大平の日、一曲調高し 舜五絃）」（『翰林五鳳集』卷三）。

○雅操 正しい節操。正しい道徳。『晉書』八十九・列傳卷五十九・「忠義」に「…若得其所、烈士不愛其存。故能守鐵石之深衷、厲松筠之雅操。見貞心於歲暮、標勁節於嚴風。（若し其の所を得れば、烈士は其の存するを愛まず。故に能く鐵石の深衷を守り、松筠の雅操を厲ます。貞心を歲暮に見、勁節を嚴風に標す）」とある。「立溫柔者、君子之雅

操也。（溫柔に立するは、君子の雅操なり）」（『本朝文粹』卷三・對冊・「陳德行」・橘淑信）。

○李唐之習俗及於今尤甚矣 「李唐」は中國の唐代。「李唐之習俗」は牡丹を愛であること。「自李唐來、世人甚愛牡丹（李唐よりこのかた、世人甚だ牡丹を愛す。）」（『古文眞寶後集』卷二「愛蓮說」）。その風潮が元祿十三年（一七〇〇）頃の京にも及んでいたことをいう。『應圓滿院殿御詠歌』<sup>190</sup>番歌の詞書に後西院遺愛の牡丹が出てくる。また、「一乘院眞敬法親王書狀」（陽明文庫藏、資料番號〈19935〉）に、一乘院宮眞敬親王が近衛家熙のために牡丹花を用立て贈る様が書かれている。

○艸木・無情 「艸木」は愛菊・愛蓮の対象である植物。北宋・蘇軾「竹枝歌」に「楓葉蕭蕭桂葉碧、萬里遠來超莫及。乘龍上天去無蹤、草木無情空寄泣。（楓葉蕭蕭として桂葉は碧に、萬里遠來し超えて及ぶ莫し。龍に乗り天に上り去りて蹤無く、草木無情空しく寄り泣く）」とある。『凌雲集』「外從五位上行山城介高丘宿禰第越二首」の「雜言。於神泉苑侍宴賦落花篇應製（神泉苑に於いて宴に侍し落花篇を賦す。應製）」に「無心草木猶餘戀。況復微臣醉恩卮。（無心の草木すら猶ほ餘戀するに、況んや復た微臣 恩卮に醉ふをや）」とある。

○賢不肖 賢い者と愚かな者。『中庸』に「賢者過之、不肖者不及也。（賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばざるなり）」とある。

○聖代 すぐれた天子が治めるめでたい代。元祿十三年の今上である東山天皇（一六七五—一七〇九）をいう。その御代には、貞享四年（一六八七）の大嘗會や元祿七年の賀茂祭など、應仁・文明の亂以降

断絶していた行事が再興された。

○春色之妖怪 牡丹のこと。北宋・歐陽脩『洛陽牡丹記』に「凡物不常有而爲害乎人者曰災。不常有而徒可怪駭不爲害者曰妖。語曰、天反時爲災、地反物爲妖。此亦草木之妖、而萬物之一怪也。(凡そ物の常には有らずして人に害を爲す者を災と曰ふ。常には有らずして徒らに怪駭すべくし害を爲さざる者を妖と曰ふ。語(『左傳』宣公十五年)に曰はく、天時に反するを災と爲し、地物に反するを妖と爲す。此れ(洛陽の牡丹)亦た草木の妖にして、萬物の一怪なり」)。策彦周良「牡丹花上有兩鳥」に「世上妖紅不較些。牡丹春色屬豪家。午過無復猫兒護。兩鳥爭先玩此花。(世上の妖紅些を較べず、牡丹春色豪家に屬す。午過復た猫兒の護るに無く、兩鳥先を争つて此花を玩ぶ)」(『翰林五鳳集』卷四十七)とある。

○關白藤公 基熙のこと。東山天皇在位期間の貞享四年より寶永六年(一七〇九)中に關白を務めた(在任は元祿三年正月十三日より同年正月十四日まで)。

○我山 大德寺のこと。参考として、「大德寺十境」に「古巖松」がある。「古巖松 舊松已に枯れて其所を失す今方丈南庭の松最秀可也故に此名をもつて呼ぶ」(『都林泉名勝圖會』卷一、寛政十一年(一七九八)跋)。「五老松」もある。「五老松 在大德寺方丈東南、五株老松現存、開山塔始在斯處」(『雍州府志』卷八)。

○青松 青青とした松。『文華秀麗集』123・嵯峨天皇「冷然院各賦一物、得潤底松。(冷然院にして各一物を賦し、潤底松を得たり)一首」に「鬱茂青松生幽澗、經年老大未知霜。薜蘿常掛千條重、雲霧時籠一蓋長。

高聲寂寂寒炎節、古色蒼蒼暗夕陽。本自不堪登嶺上、唯餘風入韻宮商。(鬱茂なる青松幽澗に生ひ、經年の老大未だ霜を知らず。薜蘿常に掛かりて千條重く、雲霧時に籠めて一蓋長し。高聲寂寂炎節に寒く、古色蒼蒼夕陽に暗し。本自嶺上に登るに堪へず、唯だ餘すは風入りて宮商に韻ぐのみ)」とある。

○禁庭 禁裏御所。もしくは宮廷の庭園。「ふりにけるほども雲るの庭の松更にやちよを君にかぞへん」(『芳雲集』4554・題「禁庭松久」)。

○爲榮枯不變節其唯青松乎 唐・邵謁「金谷園懷古」古體詩に「死不變節、花落有餘香。(竹死すれども節を變へず、花落つるも餘香有り)」(『全唐詩』卷六百五)とある。類似の表現に、南宋・楊時「送鄭季常趣太學正(鄭季常の太學正に趣くを送る)」の「青松不改柯、期子清霜時。(青松柯を改めず、期す子の清霜の時)」。

○苾芻 僧。桂嶽宗芳の自稱。『性靈集』二の「大唐青龍寺故三朝國師碑」に「日本國學法弟子苾芻空海撰文」とある。

○蕪言 自分の文言をへりくだつていう語。

○台覽 基熙の御覽に入れること。

○子墨卿 「墨」を擬人化し、問答の形式をとる。「子」は、自分の先生に對してその姓氏の上につけて、敬意を表す呼稱。『公羊傳』隱公十二年「子沈子曰:」、何休注「沈子稱子、冠氏上者、著其爲師也。不但言子曰者、辟孔子也。其不冠子者、他師也(沈子に子と稱し、氏の上に冠するは、其の師たるを著すなり。但だに子曰と言はざるは、孔子を辟くるなり。其の子を冠せざるは、他師なり)」。北宋・蘇軾「萬石君羅文傳」に「羅文歎人也。……毛穎之後毛純爲中書舍人。……是時

墨卿・楮先生皆以能文得幸、而四人同心、相得歡甚。時人以爲文苑四貴。每有詔命典策、皆四人謀之。其大約雖出於上意、必使文潤色之、然後琢磨以墨卿、謀畫以毛純、成以授楮先生。使行之四方遠夷、無不達焉。（羅文は歎人なり。……毛穎の後の毛純中書舍人と爲る。：是の時、墨卿・楮先生皆能文を以て幸を得て、四人心を同じくし、相ひ歡を得ること甚し。時人以て文苑の四貴と爲す。詔命典策有る毎に、皆四人之を謀る。其れ大約は上の意に出づると雖も、必ず文をして之を潤色せしめ、然る後に琢磨するに墨卿を以てし、謀畫するに毛純を以てし、成りて以て楮先生に授く。之を四方遠夷に行はしめ、達せざる無し）」。

○恩澤 恩惠。君主が恵みを與え、人人をうるおすこと。

○一艸一木 一本の草や一本の木。南宋・陸游「金山寺詩序」に「一草一木、雖未萼發、而或青或凋、皆森植可愛（一草一木、未だ萼發せざると雖も、而れども或いは青く或いは凋む。皆森植愛すべし）」。

○君子之中庸 どちらにも片寄らないで常に變わらないこと。『中庸』の「仲尼曰。君子中庸。小人反中庸。君子之中庸也。君子而時中。小人之中庸也。小人而無忌憚也。子曰。中庸其至矣乎。民鮮能久矣。（仲尼曰く、君子は中庸す。小人は中庸に反す。君子の中庸や、君子にして時じく中る。小人の中庸や、小人にして忌憚する無きなり、と。子曰く、中庸は其れ至れるかな。民能く久しうすること鮮し、と）」は、君子の行いが中庸であることを説く。

○時中 時にしたがって、適切であること。いつでも節度にかなつていること。

○擇賢 北宋・歐陽脩「上杜中丞論舉官書（杜中丞に上りて官を擧ぐるを論ずる書）」に「況今斥介而他舉。必亦擇賢而舉也。（況んや今介を斥けて他舉するをや。必ず亦賢を擇びて舉ぐるなり）」とある。

○簡在帝心 『論語』堯曰の「曰、予小子履、敢用玄牡、敢昭告於皇后帝。有罪不敢赦、帝臣不蔽、簡在帝心。朕躬有罪、無以萬方。萬方有罪、罪在朕躬。（曰く、予小子履、敢へて玄牡を用て、敢へて昭かに皇皇后帝に告す。罪有るは敢へて赦さず、帝臣蔽さず、簡ぶこと帝心に在り。朕が躬罪有らば、萬方を以てすること無けん。萬方罪有らば、罪は朕が躬に在らん）」は、賢人を蔽うことなく御心のままに選ぶ意。

○賢者 賢明な人。前漢・王子淵「聖主得賢臣頌（聖主賢臣を得るの頌）」の「記曰、恭惟、春秋法、五始之要、在乎審己正統而已。夫賢者國家之器用也。所任賢、則趨舍省而功施普。（記に曰く、恭しく惟んみるに、春秋の法、五始の要是、己を審かにして統を正すに在るのみ。夫れ賢者は國家の器用なり。任ずる所賢なれば、則ち趨舍を省きて功の施普し）」（『文選』卷四十七、『古文眞寶後集』卷六）は、賢者が國家を治める用器であることをいう。

○耕雪裁霜 松の勁節をいう。魏・劉楨「贈從弟詩三首」其二に「亭亭山上松、瑟瑟谷中風。風聲一何盛、松枝一何勁。冰霜正慘悽、終歲常端正。豈不羅凝寒、松柏有本性。（亭亭たる山上の松、瑟瑟たる谷中の風。風聲一に何ぞ盛んなる、松枝一に何ぞ勁き。冰霜正に慘悽なるも、終歲常に端正なり。豈に凝寒に羅らざらんや、松柏本性有り）」（『文選』卷二十三）、李善注「莊子曰、天寒既至、雪霜將降。吾是以

知松柏之茂也（莊子曰、天寒既に至り、雪霜將に降らんとす。吾是を以て松柏の茂るを知るなり）。

○澗底苗 谷底の松。人目につかない松。大徳寺の松を卑下している。左思「詠史八首」其二に「鬱鬱澗底松、離離山上苗。（鬱鬱たり 潤底の松 離離たり 山上の苗。）」（『文選』卷二十二）。

○根株何幸入官寮 禁庭に移し植えられた大徳寺の松を、幸運にも取り立てられた人に見立てる。「孤松呈勁節、幸許在中庭。久苦寒霜素、猶全細葉青。故山辭澗底、新地近仙亭。塵尾應堪用、攀將奉執經。（孤

松勁節を呈す。幸に中庭に在ることを許す。久しく寒霜の素きに苦しむ。猶ほし細葉の青きを全し。故山澗底を辭し、新地 仙亭近し。塵尾用あるに堪ふべし。攀きて執經に奉ぜんとす）」（『菅家文草』卷五・404・「松」）。

○根株 植物の根と幹。唐・白居易「東坡種花（東坡に花を種う）二首」其二「將欲茂枝葉、必先救根株。（將に枝葉を茂らさんと欲すれば、必ず先に根株を救へ）」（『全唐詩』卷四百三十四）。

○官寮 官僚。唐・白居易「求分司東都寄牛相公十韻（分司東都を求め牛相公に寄す十韻）」に「官寮幸無事 可惜不分支（官寮幸ひに事無し、惜しむべし分司たらざるを）」（『全唐詩』卷四百四十六）。

○青青 松のいかにも青いさま。唐・王維「新秦郡松樹歌」に「青青山上松 數里不見更逢（青青たる山上の松、數里見えずして今更に逢ふ）」（『全唐詩』卷百二十五）。

○毓秀 すぐれた草木を育てる。南宋・度正「送張義立制幹赴闕探韻得東（張義立制幹の闕に赴くを送り、韻を探りて東字を得たり）」に「地

靈育秀殊未已、有偉男子如衛公。（地靈の秀を育つこと殊に未だ已まらず、偉男子有り 衛公の如し）」（『性善堂稿』卷二）とある。「子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫（子の曰わく、苗にして秀でざる者有り。秀でて實らざる者有り。）」（『論語』子罕）。

○離塵 世俗の塵を避け離れること。唐・朱慶餘「和劉補闕秋園寓興之什（劉補闕の秋園寓興の什に和す）十首」七に「石脈潛通井、松枝靜離塵。（石脈潛かに井に通じ、松枝靜かに塵を離る）」（『全唐詩』卷五百十四）。

○鬱鬱 樹木のこんもりと茂るさま。前掲「澗底苗」項に記した左思「詠史八首」其二を參照。

○摩霄 空にせまるほど接近する。南宋・周紫芝「時宰生日詩六首」其三に「南山一何高、山高亦何有。上有摩霄松、蒼虬立盤糾。（南山一に何ぞ高き、山高くして亦た何か有る。上に摩霄の松有り、蒼虬して立ちて盤糾す）」（『太倉稊米集』卷三十二）。

○拔俗 世間一般の人から抜きん出て優れている。孔稚珪「北山移文」に「夫以。耿介拔俗之標。蕭灑出塵之想。度白雪以方潔。干青雲而直上。吾方知之矣。（夫れ以んみるに、耿介俗を抜きんでたるの標、蕭灑塵を出でたるの想、白雪を度りて以て潔を方べ、青雲を干して直ちに上る。吾方に之を知れり）」（『文選』卷四十三、『古文眞寶後集』とある。

○標 梢。『後漢書』馬融傳「杪標端」、章懷太子注に「竝木末也（杪標）竝びに木の末なり」とある。

○避雨 『藝文類聚』卷八十八・松引『漢官儀』に「秦始皇上封太山、

逢疾風暴雨。賴得松樹、因休其下、封爲五大夫。（秦の始皇上りて太

山に封じ、疾風暴雨に逢ふ。賴ひに松樹を得て、其の下に休むに因りて、封じて五大夫と爲す」。『太平寰宇記』卷二十一に「大夫松、始

皇避雨處、今猶在（大夫松、始皇の雨を避くる處、今猶ほ在り）」。

○偃蓋 ふせた笠の形をした松。笠松。唐・杜甫「四松」に「足以送老姿、聊待偃蓋張。（以て老いを送るの姿に足り、聊か偃蓋の張るを待つ）」（『全唐詩』卷二百二十）。

○和風 風に調和すること。唐・司空圖「爭名」に「荷香浥露侵衣潤、松影和風傍枕移。（荷香 露に浥るほ 露に浥るほ 衣を侵して潤ひ、松影 風に和して枕に傍ひて移る）」（『全唐詩』卷六百三十二）。

○虞韶 虞舜の作った韶という音樂。虞舜は中國五帝の一。唐・元稹「松鶴」詩に「清角已沈絕、虞韶亦冥冥。（清角 已に沈絶し、虞韶 亦た冥冥たり）」（『全唐詩』卷三百九十八）。唐・黃頤「風不鳴條（風條を鳴らさず）」詩に「太平無一事、天外奏虞韶。（太平一事無く、天外虞韶を奏す）」（『全唐詩』卷五百五十二）。

○移巢棲宿千年鶴 『淮南子』說林訓の「鶴壽千歲」のように齡千年とされる鶴が松に巣をつくること。唐・孟貫「贈隱者」に「百尺松當戶、千年鶴在巢。（百尺の松戸に當たり、千年鶴巣に在り）」（『全唐詩』卷七百五十八）とある。

○蓬萊 蓬萊山。晉・郭璞「遊仙詩七首」其一に「京華遊俠窟、山林隱遯棲。朱門何足榮、未若託蓬萊。（京華は遊俠の窟、山林は隱遯の棲。朱門何ぞ榮とするに足らん、未だ蓬萊に託するに若かず）」（『藝文類聚』卷二十）。南宋・劉克莊「雜記、六言五首」其四に「回仙一歲一度、

來聽蓬萊松風。（回仙 一歲一度、來り聽く 蓬萊の松風）」とある。

#### ▼通釋

#### 松井びに序

往時の君子は、心を寄せてても、正氣を失うことなく、物事を愛し好んだ。樂水樂山の孔子の格言。淵明の愛菊、茂叔の愛蓮。詩人の題詠、高樓に飾られる繪畫の畫題、千年續く正しい節操、牡丹を愛てる李唐の習俗は今も盛んである。草木に心はないが、賢い者もそうでない者もどういうわけかこれを愛する。

謹んでよく考えてみると、すぐれた天子が治める今の御代には、卑俗が改められ、誤ったことが正道にもどされた。天子が愛でられるのは、あだめた春の花木ではなく、厳しい冬の常綠樹である。關白藤原基潤公は、天子のお好みをお察しになり、當山大德寺の青松を取り寄せられ、内裏の御庭に移し植えられた。およそ水陸に存するあらゆる草木は、あるものは春に盛りを迎えて夏に弱り、またあるものは秋に抜きん出て冬になってしまふ。四季に關係ないのは青松だけであろうか。まもなくこの僧<sup>宗芳</sup>に命があり、つたない一律を詠み、謹んで公の御目にかけることとなつた。

書齋の子墨卿（墨）が尋ねた。中とは片寄らないことを言う。天子が一株の松や一樹の竹に執着なさることなどあろうか。天子は、あらゆる草木に、隔てなく恵みを與えなさるものではないのか。  
答えて言う。君子の中庸は未だ十分ではない。君子は、いつでも適切に賢者を選び、これを取り立てる。君子はものを見分ける力を備えておられる。天子は御心のままに選ばれる。そうでなければ、賢者は

何にすがればよいのだろうか。

以上を序とする。

雪に耕し、霜に栽え、苦難に耐えた谷底の松の苗。

その根株が宮中に移され、宮仕えする幸運を得た。

世俗から離れた地では、青青と秀でた樹木を育み、

やがては、こんもりと茂り、空にせまるほど抜きん出た梢となろう。

雨を避けて寄りかかる時は偃蓋を張り、

風に和して吟ずる時は虞詔を奏てる。

齡千年の鶴が巣を移して宿り住む。

その鶴は蓬萊山の松の第一の枝に棲んでいた。

(川崎)

(かわさきさちこ 本學文學部教授)  
(よしむらひろみち 本學文學部特任教授)  
(まつおはつこ 本學文學部授業擔當講師)  
(なかもとだい 本學文學部教授)  
(こうとう 福州大學外國語學院講師)  
(こうゆさ 本學文學研究科博士課程後期課程)